
転生者は超能力者でガンダールヴで【*****】

しょうゆさし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は超能力者でガンダールヴで【*****】

【Nコード】

N8210S

【作者名】

しょうゆさし

【あらすじ】

タイトル変更しました 旧タイトル とある”感情起伏”のゼロ魔日記

ごく普通のゼロ魔好きな青年、空雷時黎くうらいじが、少年を助けて死んでしまった！
しかしそれは実は神のミスで、ゼロ魔の世界に飛ぶことになりました！

・・・なにこのありきたり

それはさておきその際神は、黎に各分野の専門知識と、特殊能力を付加したそうです

これは、そんな青年がゼロ魔の世界でそこそこ強そうな能力を駆使して

気ままに過ごすお話です

第0P プロローグってカンジ？

チュン、チュンチュン・・・・・・・・

すずめの鳴き声と共に朝日が訪れる

今日もいい天気だ

青い空に、白い雲

外に出て軽く背伸びをすれば、今日も一日やるぞ！ という気力があふれてくる

外に出たついでに、郵便受けから新聞を取り、家へ入る

朝6時に炊けるようセットした炊飯器は、今日も誤作動無くしつかり働いてくれていた

朝はアツアツの白い飯に、味噌汁 それからおかずに納豆か卵焼き

それがこの青年の朝飯の定番であった

銀シヤリ、という言葉があるが炊きたてホカホカで

さらにいい香りの湯気立ち上る白米を前にすればおそらく誰でもひれ伏すであろう

ご飯をよそう前に、昨日の残りの味噌汁に火をかける

昨日の味噌汁は、ナスとタマネギにゴボウというものだった

青年はゴボウが好きだ あの歯ごたえ、たまらない

そして鍋に火をかけた後は、新聞に目を通す

家庭科の授業等では、火をかけている最中に目を離すな、というのは常識だが

火の通りにくいもの、たとえばジャガイモだが、そのようなものを煮ている時

横で洗物など、別の作業をするのが、主婦の常識だろう

新聞の一面には、こんなことが書いてあった

『ゼロの使い魔 大人気』

ゼロの使い魔といえば、最近若者に人気の”ライトノベル”の中でもかなり有名で

今ではマンガやアニメにもなっているアレだ

青年も、実は興味があるのだが、わざわざ買うほどでもないような程度だった

・・・いや、買うのが恥ずかしかったというのも大きいが

そんなこんなで青年はこの『ゼロの使い間』という作品を深く知りたいがために

最近二次創作であるSSにハマっていた。

こんな自分がファンと言っているのであれば、ファンとして、この記事は嬉しい限りである

それにしても、一面に載るほどの売れ筋なのだろうか？

やっぱり本物買おうかな？

そんなことを考えていると、コンロのほうから『ブシューッ』と音が聞こえてくる

「やべっ！」

青年は、机の上に新聞を放り出し、いそいでコンロに向かった

案の定、味噌汁が鍋からこぼれている

「あーあ・・・」

急いで火を止めるも、後の祭りだ

とりあえず、火事にならなくて良かったという事にしておこう

棚から器を取り出し、味噌汁をよそう

それから冷蔵庫の中から納豆、漬物を取り出してダイニングテーブルの上に持っていく

テーブルまで行くと、さっき放った新聞紙が邪魔な位置にある

うっとうしいので肘でテーブルの下に突き落とすと、おわんが斜めになって味噌汁が少しこぼれる

「っだあ！　もう！」

今日は味噌汁運が悪い、と訳の分からないことを考えながら

納豆、漬物をテーブルの被災していない部分に置き

テーブルに常用してある布巾でテーブルを拭いて、おわんについた味噌汁もぬぐう

そしておわんをテーブルに置き、棚から茶碗をだして次は米をよそう

そして帰りがけに箸を取って、テーブルに向かう

「いただきますっ！」

両手を合わせて、声高々と叫ぶ

そして、まず食べる前にテレビをつける

「ええ〜とですね今日は、最近若者に人気の”ゼロの使い魔”という作品についてご紹介します」

「ゼロの使い魔、ですか？」

「ハイ！ なんでも最近大人気で、社会現象にもなりつつあるようです」

『これは、昨日午後２時のようすです』

そうテロップがながれたと思うと、秋葉原の風景が映し出される

男は興味深そうにそれを眺めながら、味噌汁を口に運ぶ

さっきの騒ぎで汁だけが三分の一くらいお逝きになったので、すこし節約しながら飲む

『ゼロの使い魔についてどう思いますか？』

「最高ッスね！」

「最高！」

「ルイズたん、ハアハア」
次は老人ホーム

「年寄りにも、おもしろいもんなんじゃのー」

「楽しめますね、はい」

そして次は

「ゼロのつかいまだいすきー!!」

と、幼稚園の子供たちが声を合わせて叫んでいた

「へー・・・」

自然と声が漏れる

ふむ、それにしてもお年寄りや子供にまで人気だとは・・・
コレは、買っても恥ずかしくないのかな？

そうだ、思い切ってコスプレ会にでも参加するか？

そしたらいろいろ吹っ切れるだろうし

と、気がついたら味噌汁が空になっていた

おかわり、するかな

＊

＊

＊

朝食を取り終え、納豆のパックにはしっかりと蓋をして、他の器は水につけておく

歯を磨き、ついでに顔を洗う

スーツに着替えて、鞆を持って会社に向かう

今日も一日、頑張ろう！

「・・・疲れた」

この一言につきる　だが、今日は金曜日だ　明日は仕事が無い

別にキリスト教徒でもないが、この日曜日＝安息日の考え方には盛大に賛成だ

土曜は半日、とのことだが1日しっかり休みだ

最近の小学生はゆとり教育を見直すとかで土曜も半日学校に行くとか行かないとか言っているようだが
子供が学校に行って、帰ってきたら父親がいるというのはなんだか問題な気がする

さて、洗物・・・いや、もう寝よう

次の日

今日も一日が始まる 目覚ましをかけていなかったのにもかかわらず
しっかり7時に起きることができた
さて、今日は何をしようか・・・特に予定も無いし、パソコンでも
していようかな？

・・・うん、SSはおもしろいなー俺もいつそこかの世界に飛べたらいいのに

と、頭に浮かんだ妄想を散らす

だが、また集まってくる

ま、妄想して楽しむくらいはいいだろう

・・・・・・技の名前は

・・・・・・ここはこうして

・・・・・・これがこーしてあーして

ハッ!?

時計を見ると、もう午前10時過ぎだった

時間を見ると、いきなり尿意や空腹感がぶり返してくる

「・・・・・・はあ」

いままで自分がしていたことは、はかない虚妄だということを再度確認した男であった

さて、それはいいとして パソコンも飽きたし外でもぶらつくことにしよう

~~~~~

あの後、洗物をしたりしていたら11時くらいになっていた

土曜の昼前ということもあり、けっこう町は賑わっている

そこで俺は書店に向かった　いろいろな専門書を買うためだ

理由は、俺も自分でSSを書こうと思い、専門知識を振りかざして内政チート！

・・・みたいな展開が書きたかったので、農業や工業、政治についての本を買いにきたというわけだ

なにに・・・農業のすべて　2800円　製鉄の歴史　2900円　世界の政治　4800円

料理のすべて　9800円

高い！！　だが・・・うむ・・・だが・・・買いだ！！

「合計、2万3百円になりまーす♪」

生活費よ、さらば・・・クツ！

だが、1冊1冊が広辞苑といい勝負の分厚さを誇るのだから、まあ妥当なのだろう

と、必死で自分に言い聞かせる

すると、横からサッカーボールが飛んできた

「危なッ」

俺はそれを華麗な身のこなしで避ける  
すると、ボールの飛んできたほうから、少年が駆けて来る

「す、すいませーん！」

「ああ、いいよ」

少年は俺に追い抜き様に会釈し、謝罪した  
そして、ボールを追いかけて道路に出るのだが・・・

少年には、ダンプカーが迫っていた

「う、うわっ！」

危ない！

考える前に体は動いていた

ドンッ

鈍い音がしたと思うと体が宙を舞う

視界が、真っ赤に染まっていく

ああ、ここで死ぬのかな

あの子、助けられたかな？

無事だと、いいな・・・

『ちよっとくらい長いプロローグで、絶望してんじゃ無エよ!!』

・・・は？

俺の眼の前でいきなり上条くんしてくれたのは、真っ白な服を着たお姉さんだった

「誰がお姉さんですか！ 私は、性別など等に超越した存在なんです！」

(つ　ん)

「ちよ！　なんですかその顔!？」

「いや・・・いきなりイタイ姉ちゃんに会っちゃったなア、と」

「このう・・・！ 折角私が善意で転生させてあげようと『善意、じゃと？』・・・あ」

なんじゃ？ 突如どこからとも無く威厳のある声が聞こえてきた

『善意・・・ほう？ 自分のミスで運命の軸を乱して それを無かったことにするために

この男の命をつなぎたいと だがその男の生きていた時空で生き返らせることは出来ないの

別の時空に飛ばしたい、と それが、善意？』

「いや・・・えっと、すみません」

お姉さんが中に向かって謝る

・・・話がさっぱりつかめない

『すまん、私の部下がちよいとミスを犯してのう・・・ほれ、コレが事件の詳細じゃ』

威厳のある声がそういうと、頭の中に情報が流れ込んでくる感じがした

「・・・つまり、あんたらは神で、この姉ちゃんがミスって俺を殺して

そのまま俺が死ぬと運命が変わるから別世界で生きてろ、と」

「ふあい・・・しーましえん」

『ま、ちやうど君は生きたい世界があるようだし・・・そこに送っ

てやろう

せめてもの手向けだ』

「ついでにいくつか望むものも付けてあげますよー！ 条件とか！」

「あ・・・それじゃ、サイトと同じタイミングでルイズに召喚って形で送ってください

それから・・・俺の買ったあの本の知識を、丸々頭にぶち込んでください」

『ふむ、よろしい ついでに異能も追加しておいてやる  
それでは・・・さらばじゃ、青年』

「はい、では！」

青年の体が光り輝き、フツと消えた

「ふう・・・行きましたね！」

『貴様、ちっとも反省しておらん？』

「・・・テヘツ★」





## 第0P プロログってカンジ？（後書き）

ざわ．．．ざわざわ

プロログからすでに不穏な空気が

なお、誹謗中傷は受け付けておりませんので、よろしくです

## 第1P ご対面ってカンジ? (前書き)

シーランドとは、イギリス近海の人工の島を国土とする国  
爵位がネットとかで買えて、ロード、レディ、男爵、男爵夫人を買  
える

裏技を使えば子爵だろうが公爵だろうが名乗っても良い

良かったと思う。

## 第1P ご対面ってカンジ？

「・・・あんた、誰よ？」

「ん？」

飛んできた、のか？

眼の前には見事なまでに桃色な髪をした美少女がいる。

俺の服装は、出かけたときのラフな格好・・・チェック柄の上着、黒色のズボンといったものだ

そういや専門知識を頭にぶち込んでほしいって言ったな・・・どれ、試しに思い出してみよう

しょうゆの作り方・・・・・・・・・・ok

ヒトラーの政治・・・・・・・・・・ok

製鉄技術・・・・・・・・・・ok

ああ、本当っぽいね まあこんなんでは信じてしまう俺も大概だが  
異能ってなんなんだろう？

「ちょっと、答えなさいよ！」

桃色ガールがギャングァン騒いでいる

いいかげん答えることにしよう

なんて答えようかな・・・そうだ、俺シーランドの爵位持ってたんだっけ

好きな名乗れる仕組みになってたから、俺大公って名乗ってたんだ それ言おう！

「・・・俺の名は空雷時<sup>くうらいじ</sup> 黎<sup>れい</sup>だ」

「ふうん、変な名前

私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ

・・・ところで、そっちはまだ目を覚まさないの？」

「俺に聞くな」

「なっ・・・！？ 貴族に向かってどういう口の利き方をしているのよ！」

「・・・すまん」

いろいろ反抗しようと思ったが、ダメだ、怖くて逆らえない（↑

結局大公のアレは・・・まあいいや、元の世界で貴族だったんだぜ  
く的な

自慢をする程度に止めておこう

「で、ここはどこなんだ？」

「ここは、ハルケギニアのトリステイン魔法学校　そしてあなたとそっちは

私の使い魔としてここに呼ばれたのよ！」

「………ちなみに拒否権は？」

「あるわけ無いじゃないの？」

ですよー

「うう……ん、ここは？」

サイトが目覚めます

「おはようクソガキ」

「いきなりひどいな！？　って、アンタ達誰？……ここ、どこ？」

いきなり言ってやったが、それを流すところを見るとなかなかの好青年のようだ

確か17歳だったかな？　中卒で、親のコネで会社に入社、16まで非正規、17になったら  
正規雇用してくれると言って、今年正社員となった俺と、出会い系を利用するすねかじり高校生  
どっちが偉いのかな？

まあ、どっちもどっちか

「はぁ・・・また同じ説明するの？ アンタ「黎だ」・・・レイ、ソイツに説明してやって」

「了解・・・さて、それでは現状確認だ！ 青年！」

「は、はぁ・・・」

「まず、ここは日本ではありません！」

「は？」

「ハルケギニアという地方の、トリステインという国 その国の魔法学校

トリステイン魔法学校です・・・さて、ここまでで何か質問は？」

「まず、アンタ誰？」

「俺は黎、空雷時 黎だ  
君は？」

「俺は平賀 才人だ・・・で、次の質問なんだが・・・魔法学校？  
トリステイン？  
聞いた事無いんだけど？」

「俺にもよく分からんが、俺達の周りにいるコスプレ少年少女達は  
どうやら

魔法使いのようだな？」

今日、学校行事で使い魔・・・ドラゴンとか、カエルとかそんな  
んを呼んでたんだが

俺達はなんの因果かあその桃色、ルイズ嬢に呼ばれてしまった  
のだよ」

「・・・・・・・・まったくわからん」

「安心しろ、俺もわからん」

「ミス・ヴァリエール・・・契約を」

とりあえず、話に決着がついたのを見計らってコルベール先生が契  
約を促す

「か、感謝しなさいよね？普通平民が貴族に、こんなことされるな  
んて

ありえない事なんだからね！」

そう言ってサイトに口付けをした

すると・・・

「ッ・・・！」

「痛っ?!?!?」

左手に強い痛みが来る

鋭いようで、鈍くもある 例えるなら槌で打ちのめされた後、針で  
突き刺されるような感じだ



だが、これは・・・痛いという次元の話ではない

「なんで1人しか契約して無いのに2人ともルーンが!？」

「これは・・・!？」

コルベール先生とルイズが驚いてる　こいつ等・・・俺達の苦しみをわかっているのか？

いまこの考えを保つだけで必死なんだぞ？　あ、もうむり　黎、逝きまーs・・・あ

痛み引いてきた　これぞ本当の生殺し（↑

「・・・見たことの無いルーンですね　どれ、少し拝見しても？」

「いいよ」

「あ、ああ」

上が俺、下がサイトだ

コルベール先生が俺とサイトの左手を取り、眺める

「ふむ・・・両方同じルーンのようにですね」

コルベール先生はそうつぶやいて、ルーンのスケッチを شدした  
すると、今まで黙っていたモブたちが騒ぎ出した

「ちょっとルイズ！ サモンサーヴァントで平民を呼び出してどうするのよ！」

「いくら召喚できないからって、その辺の平民を連れてくるなよな！」

心無き悪口・・・言葉の刃が飛び交う

だがルイズはその悪口に、顔を赤くして反論する

「ちょ、ちょっと間違えただけよ！」

「間違いで平民を2人を呼ぶなんて、さすがゼロのルイズだ！」

誰かがそういった途端、部屋が笑いの渦に包まれた

ルイズは黙って拳を握り締め、うつむいている

「はい、皆さん！ 授業はもう終わりです！ 学院に戻ってください」

そこで、スケッチを描き終えたコルベール先生が叫んだ

すると、周りのモブたちはフライを使って飛んでいってしまった

「飛んでる！？」

サイトが叫んだ

「お前は歩いてこいよ、ゼロのルイズ！」

「あいつ、フライどころかレビテーションもできないんだぜ？」

「その平民達、あんたにお似合いの使い魔じゃないの？」

「……うわぁ、うつぜえ！ あいつ等うぜえ！！ 実際聞くとマジでうぜえ！」

人を煽ることしか言えないのか！？

だが……ここは耐えよう 馬鹿にされてるルイズが耐えてるんだ俺が怒るのも、なあ？

「お、おい！ なんなんだ、あんた達は！？ 俺の体に何をしたんだ！？」

サイトがややキレ気味で怒鳴り散らす

フライで飛んでいった人を目の当たりにして、改めて興奮しているようだ

そんなサイトに、ルイズは冷たい態度で返す

「アンタ……どのくらい田舎から来たのよ？」

ここは！ トリステインの、トリステイン魔法学校！」

「魔法学校……ってことは、さっきのは魔法！？」

「俺がそう説明しただろうが！ さっきの奴等は貴族で、魔法が使えるんだ」

「貴族う？」

「そうよ、感謝しなさいよね？ 普通、平民が貴族に口を聞いても  
らえるなんて

ありえないんだからね？」

「聞いてもらえるって・・・呼びつけといてそりゃ無いだろ」

「なんですって！？・・・ま、いいわとりあえず学院に戻り  
ましょう」

そう言うと、ルイズは美しい足取りで学院の方に歩き出した

これが、俺達の出会いだった

## 第1P ご対面ってカンジ? (後書き)

〽次回予告〽

「なあ、黎 ルイズってなんでゼロって呼ばれてるんだ?」

「俺が知るわけが無いだろ・・・でも悪口には違いない」

「そうか? なんかカッコイイじゃん すべてを無に帰す的な」

「中二病乙」

「相変わらずひでえ!」

次回 「授業ってカンジ?」

## 第2P 能力判明ってカンジ？

「信じられないわそんな話 月がひとつ？ 魔法が無い？  
どういうことよ、それ」

一通り東京や此方の世界の説明を終えたところ、ルイズから突っ込みが入る

「知るか、俺が知りたいくらいだ」

サイトがブスツとして答える

「ま、論より証拠だ 俺達の世界の飯でもいつか作ってやるよ」

料理についてぶち込んでもらったからね 少しは役に立てないと

「私の知らない料理なんて、それこそ星の数あるわよ 証拠にならないわ」

「あ、俺証拠あるぞ！ ほら、これ！」

サイトがすごく嬉しそうに取り出したのは、携帯電話だった

「ほう、でかしたサイト」

「なによそれ？」

「これはな、遠くにいる人と話が出来る機械だ」

サイトが誇らしげに語る

って、このバカ・・・圏外だろうに 写真を取ればいいものを！

「そんなマジックアイテムくら、いくらでもあるわよ」

「それに圏外だろうに 写真とって見せればいいんじゃない？」

俺が突っ込むと、サイトは「その手があったか！」みたいな顔をしてルイズのほうに携帯を向ける

「はい、笑ってー？」

「え・・・？ せゝの★／ キャア！？ ｐｼｬ／」

ちなみに／の中は機械音ということで・・・あれ、なんか電波がうわなにをするやめ（ry

ちなみに状況説明としてはシャッター音の／せゝの★／に驚いて変顔になった顔で撮れたというわけ

サイトが変顔写真を見てぼやく

「あっちゃあ・・・」

どれどれ？

「あゝ・・・ま、これはこれでカワイイじゃん？」

「な、なによ、なんなのよ！」

ルイズが怒り出しそうなので携帯を奪って、ルイズに見せる

「……………な、なによコレ！」

って、それにこんなマジックアイテムもあるわよ！」

「つまり携帯はボツか……………うーん？」

なんかあつたかなー

と考えて内ポケットをさぐる

「あ……………ライターだ ほら、火がつく」

ライターがあつたので火をつけてみせる それを見てもルイズはあくまで冷たく返す

「機械仕込の火石?……………珍しいもの持ってるじゃない」

「なんでだ！」

この娘はどんだけ認めたくないんだよ！

「……………で、使い魔って具体的になにするんだ？」

サイトが異世界うんぬんは諦めたようで、唐突に尋ねた

「使い魔って言うのはね（ry）」

略したところを要約するところだ



★使い魔の目となり耳となる

俺達とは感覚を共有できない

★秘薬を見つけてくる コケとか、硫黄

★主を命を賭して守る

「命を賭して、かよ」

「そうよ！ 感覚の共有は出来ないし、どうせ秘薬も見つけられないでしょう？」

「「無理だな（ね）」」

ハモツた・・・ま、農業や工業の知識の中に硫黄だろうがニトログリセリンだろうが

コケだろうが知識が詰まってはいるがな

「でしょ？ なんだから、命をかけて主人を守って、雑用をする！  
このくらいしなさいよ！」

なぜに呼びつけておいて上から目線！？

「ま、いいわ 私はもう寝るから 洗濯しておいてねー」

ルイズはそういうとその場で着替えだした クッ これはキツイかもしれない

「お、お前何やってんだよ！？」

「何って・・・寝るから着替えるんじゃない」

「だからって男の前でだな・・・」

眼の前では例の漫才が繰り広げられている  
にしてもルイズの平民の見下しっぷりはすごいよな

「男？ なに言ってるの？ あなた達使い魔でしよう？」

使い魔にも性別はあるだろうがよ・・・

「って、俺達はどこで寝ればいいんだ？」

俺が尋ねると、ルイズは床を指差した

「俺達はペットかよ！・・・・・・せめて、毛布的なものの支給は？」

「しょうがないわね・・・あの棚の中にあると思うから、使っているわよ」

おお！ やったぞサイト！ 俺のおかげで毛布を手に入れ・・・なんだその顔は

せっかく俺の外交手腕によって毛布を得たというのに！

まったく・・・

「毛布は・・・あった 2枚だな ほら」

棚をあさると、毛布が2枚あった サイトがなんだか不憫なので  
毛布を2枚放り投げる

すると、サイトが不思議そうな顔をして此方を見てくる

「2枚使えば？ 俺、外うろついてくるよ」

「・・・わかった ありがとう」

そういつてサイトは1枚下に、1枚上にはおって寝だした。

とりあえず俺は部屋の外に出た。

さて、これからどうしようか？ 特殊能力ってなにか知りたいな・・・

・

そう考えると、ふと頭の中になにか浮かんでくるかんじがした

なんだ？ プリントみたいだな

く能力の概要く

普段使える能力 サイコフアイター  
念戦人

能力 自分の中に眠る魔力の類を具現化、使用できる

体の奥底から、力を集める感覚だ

それから、一応魔力の制限があるから注意してな？

そこはお前が鍛えればどうにでもなるけど

P・S

いくらでも応用が利くから頑張ってくれ

それから、君にはもういくつか能力をプラスした

ま、それは追々わかるだろう　ちなみに、君の知識についてだが  
医学についてもぶち込んでおいた。

ちなみに、力の使い方としては某ドラゴン＊ールに出てくる『気』  
みたいなかんじね

~~~~~

つと？

サイコフアイター
念戦人？

何その中二病・・・

試しに、右手に、体中から力を集める感覚で力を込める

すると右手が光沢を持つ紫に染まる

「ほっほう・・・これは」

なかなか楽しい能力だな

よし、試しに広場で使ってみよう

*

*

*

*

着きましたー いやぁ・・・迷った迷った（↑

さて、ドラゴ＊ボールの気みたいな感覚だ？

とりあえず足に纏わせて地面を蹴る　すると、体が大きく飛び上がった

うわああああああ　冷静に冷静に冷静に冷静にいいいい！！

そおい！

・・・え？

(；。D。)

(。D。；)

(；つDC)ゴシゴシ

(。D。) Why?

なんと、空中を魔力を込めて蹴ると、さらに空高く飛び上がったではないか

そして、試しに足に少し強めに魔力を込めると、空中に立つことができた

「これは・・・スゲエな」

さて、次の研究だ

ドラゴ*ボールといえばあれだろ、アレ かめはめ波！

あ、でも魔力に制限あるんだっけ？

ま、気にしない気にしない！ どうせ寝れば補充され（ry

「ふう・・・か！」

とりあえず空に立ったまま息を整え、両手を前に突き出し、魔力を

そして、空から体のいたるところを焦がした女性が箒に乗って降りてきた

美人だn「なにすんのさアンタアアアアアアア!!!」

バシィイイン!

箒で顔面を殴られた ま、魔力のバリアを張ったから痛くないけど

「ごめんなさい 不慮の事故です」

「こんの・・・これだから蛮族は!」

ん?・・・蛮族?

「って、エルフ!?!」

その女性の耳は、長く伸びて尖っていた なるほど美人な訳だ

「そうだよ、エルフで悪いかい?」

「いや・・・悪くないですけど、なんでこんな夜に空を飛んでたんですか?」

「アンタに話す義理は無いよ・・・ったく、反射を使ってなかったらどうなったことか!」

エルフの女性がばやく にしてもエルフの反射をぶち破るとか、俺のかめはめ波すげえ

「や、重ね重ねすいません ほんつとごめんなさい！」

俺があやまると、エルフの女性が困ったような顔をして、ため息をついた

「そんなに誤られちゃ、こっちが悪者みたいじゃないか
ま、いいよ 許したげる こんなところ飛んでた私も悪いしね
……私の名前は、アルデイスよ」

お、許してくれた上に名前まで！

「俺の名は黎、空雷時^{くつらいじれい} 黎だ！」

俺が名乗ると、アルデイスは微笑した

「黎……珍しいが、いい名だね また、縁があったら」

そういうと、彼女は箒に腰掛けて去って行った

「……なんだったんだ」

~~~~~

やっほー、黎だよ

今、学院の庭……って言うのかな？

庭の木の上に腰掛けて月を眺めています

キレイだなー・・・・・・・・orz

クソツタレエ！

サイトに毛布を渡したせいで戻って寝ることも出来ない！

仕方ないな・・・この能力の応用法でも考えよう

まず、かめはめ波系列のデスビーム的なのが覚えたいな

出るかな？

人差し指に魔力を集中、放つ！

ズバアアアアアン！

っと・・・指から放つエネルギー波みたいになった 太すぎ！

もっと魔力を集中しなきゃだめだな

それから、ガンダールヴの力を誘発できる武器を作れるといいな

魔力の槍とか、剣とか、ナイフとか

・・・そういやさつき足に魔力纏わせたらすげえ力が出たな  
体に纏わせて戦うのかもアリだな

つーかさつき自然とやっちゃったが、魔力の膜みたいなの張ると  
打撃攻撃の軽減もできるみたいだな

よし、こんな時は技の名前と用途を考えてすごそう！

☆★@★★☆

いろいろ決まってきたな・・・ふむ、朝日が見えるよ

そろそろ部屋に帰るか 寝不足だし、授業中に寝てしまおうかな

はい、部屋に着いたよ・・・さて 暇だから俺の寝ずに考えた技の  
ひとつ

『サイコパワー念動力』でサイトをルイズのベットにそつと置いというてやろうか  
な？

・・・いや、さすがにやめよう サイトの命が危ない

にしてもこいつ等、気持ちよさそうに寝やがってコンニャロめ！

仕方ない、心優しい俺は洗濯をしておいて・・・やっぱやめ、メイ  
ドさんに渡そう

下着を持って・・・と

だめだ、女の子の下着を抱えて歩くとか、変体の所業だ

早く、早くメイドさんに渡すんだ！ 俺の理性が生きているうちに！

と、急ぎ足で歩いていると曲がり角で誰かとぶつかり、洗濯物が宙を舞う

「きゃあ!？」 「っと？」

洗濯物を見る限り、メイドさんとぶつかったようだが  
魔力のバリアを咄嗟に展開したので向こうが一方的に吹き飛んでしまった

「いったあゝ・・・ぶつかってすいません」

「ああ、こちらこそすまん」

寝不足で機嫌が悪いこともあって、少し文句を言おうと思ったが  
(こっち無傷だけでも)

先に謝られたのでは仕方ないので、手を差し出す

「どうも・・・って、そのルーンは！」

「そう、俺が召喚された平民だ」

「あなたが、ミス・ヴァリエールに召喚された使い魔なのですね！  
でも、本当に人間だなんて・・・」

「俺は黎 空雷時 黎だ よろしく」

「はい、私はシエスタといいます この学院でご奉公させていただいている者です」

なんと、この子がシエスタか・・・うむ美人だ  
だがルイズやアルデイス比べると見劣りするなく・・・って、そう  
じゃないそうじゃ！

「よろしく、シエスタ・・・で、これ洗っついてほしいんだけど」

俺がそういうと、シエスタは洗濯物がバラバラに  
散らばっていることを思い出したようだ

「そ、そうでした！ 早く洗濯しないと！」

「ほらよ」

俺は相変わらずとってもいい人なので 『念動力』<sup>サイコパワー</sup>で拾うのを手伝う

と、というか全部一度に拾ってあげて、かごに入れる

「わわ、す、すいません」

シエスタが申し訳なさそうにかごを持つ

「いや、いいよ それじゃあまたねー」

俺はそう言って部屋に戻った

続く

## 第2P 能力判明ってカンジ? (後書き)

〽次回予告〽

黎「おい、サイト 前回の予告と内容が違っじゃねーか  
どうしてくれる!」

サ「ええ!?!俺!?!」

黎「という訳で次回こそ! 「授業ってカンジ?」  
お楽しみにねー★」

### 第3P 授業ってカンジ？

ちわーっす三河屋でーす

・・・・三河屋、もとい皆大好き空雷時黎だよーく、う、ら、い、じ！

はい、ウザイですね、すみません  
だって、だって！ 適当につけた名前だから作者が覚えられないいうわなにするやめr

さて、今ルイズの部屋の前に居るんだが、普通に起こすのもつまらない

と、いうわけで選択肢を作ってみましたー、イエーイ！

？念動力でイタズラ

？普通に起こす（無しの方角で）

？起こさない



うーん……よし、？だ

何でかって？ そりゃお前俺が寝ずに技を考えたりしてたのに  
こいつ等グースカ寝てるんだぜ？ ムカつくだろ？

しかもお前……サイトとか異世界に来たって言うのによく寝れる  
よね！？

お兄さんその精神が羨ましいよ！ ホントに！

ん？ そこ、自業自得とか言わない

それに良く考えたらまだまだ起こすには早い

さて、これからまた暇になるわけだが……どうしようかな？

昼飯時まで、シエスタの洗濯のお手伝いでもするか

あの量を一人でやるとか、2時間くらいかかるだろうし

とっても、とーっても優しい（自称）俺が手伝ってあげればすぐ終  
るだろう

飯を頂く際に恩を売っておけば役立つだろしね

って、すぐ終わったら暇つぶしにならないじゃないか！

ま、イザとなれば授業に出てルイズの鍊金による教室の破損を押さ  
えてやることにしよう

よし、水場へGO！

☆★@★★☆

迷わなかった！ 奇跡だ！！

ま、空から場所を確認したから当たり前といえば当たり前だが

究極の方向音痴の俺としては、ルイズの部屋に行くにも時間がかかったからね

「よ、シエスタ」

俺が声をかけると、シエスタが笑いかけてきた

「ああ、レイさん！ なにか御用ですか？」

「いや、洗濯を手伝おうと思ってね『サイコパワー念動力』」

俺はシエスタの返事も聞かず、サイコパワー念動力で、水と洗剤、洗濯物を飲み込み

竜巻のように回す！

「え、あ！・・・すごい、汚れがドンドン落ちていく！」

どこのCMですか・・・さて、そろそろ良いかな？

竜巻を崩して、干す、干す、干す！

「はい、終わりー」

俺がそういうと、シエスタが感嘆の声を上げる

「すごい・・・って、レイさん、今の魔法じゃ・・・!？」

え、今更!？

「ううん、ちがうよ？ 俺メイジじゃないし」

「それじゃあ、今のは？」

当然の疑問だな・・・ま、超能力ってことにしておくか

嘘はいけないよ、嘘は

「魔法じゃないよ超能力だ」

「へっ・・・超能力、ですか」

「で、ものは相談なんだが、シエスタさん？」

「はい、何でも言うてください！ 私に出来る限りのことはさせて頂きますよ？」

うわ、ほんといい子やわあ、この子！

「ご飯ちょうだい？」

俺がそういうと、シエスタは『は?』みたいな顔をした

な、なんだいなんだい!　いくら古今東西天下無双の黎君だって食事は欲しいんだよ!

あんなよくわからんパンとかスープレなど食えるかア!!

「えっと・・・マルトーさん　いえ、コック長に聞いてみないと  
なんとも言えませんが、たぶんまかない食でしたらお分けできる  
と思いますよ?」

おおおおお!

「有難い!!　あと、できたら俺ともう一人分用意してくれると嬉しい」

サイトの分ね　うーん、俺優し(r y

「ハイ、善処します　もし用意できることになったらお伝えします  
ので^^」

シエスタ　の　てんしスマイル!

れい　は　7800のせいしんだメージ　を　うけた!

グ・・・ツハア!　つゆぞ見たことの無い天使スマイル!

すげえ威力だぜ・・・!

すると、俺が悶えているのを見て、心配したシエスタが声をかけてくる

「あ、あの？　どうかしましたか？」

「い、いや・・・なんでもないよ」

萌え苦しんでいたなんて言えな（ry

「じゃ、じゃあ食事の件、頼んだよー！」

そういう残して『魔空歩』サイコ・スカイウォークで空を駆け上り、その場を去った

さて・・・そろそろ起こす時間だな　いい暇つぶしになった

☆★@★★☆

只今、ルイズの部屋に居る黎君だよー

やっと迷わずに来れた・・・orz

「おーい、サイト　朝だぞ、起きろ」

「グゥ、グゥ」

って、今思ったけどこいつ等全員アニメ顔なんだよねー

俺の顔はどうなってんだ？

ま、今はいい、今はとにかくこの坊やをたたき起こさねば

息を大きく吸い、叫ぶ！

「起きろや ゴルア（＃。＼。メ）ー！ー」

「うおおおおおお！！？」 「キャアアアアアアアア！！？」

おっと、ルイズまで起こしてしまった まあいい、不可抗力だ

「朝だぜガキ共！」

「な、アンタ誰よ！」

・・・やっぱり忘れてやがったか、この桃色は

「よし、一度顔を洗え そして記憶を整理しろ」

俺がそういうと、勝手に思い出したようで、納得した声を出す

「ああ、昨日召喚したんだったわね・・・」

ルイズはそういうと、『んゝッ』と、伸びをして、命令した

「そこのクローゼットの中に服があるから、とって頂戴」

自分でやれよクソガk・・・と言いたい所だが飲み込む

俺はとっつても優しいからね！

「ほらよ・・・おい、サイト もう一回寝たらお前の髪の毛を毎晩10本ずつ抜くぞ」

俺が脅すと、まるでバネ仕掛けの人形のように起き上がった

「さて・・・そろそろ朝飯の時間だな 急がないと遅れるぞー」

シエスタは交渉成功したかな？ してなけりゃあ”あの”パンを食うことになるからな

「外出ろー、外」

2人をとつと外に出す・・・って、俺はお前らのお母さんか！

とか考えていると、隣の部屋から炎のような色の髪の毛をした少女が現れる

執拗に胸を露出しており、サイトみたいな変体を引っ掛ける気なのが見て取れる

って、胸でかいな本当 とりあえず跪いて挨拶をしておく

「おはようございます、ミス・ツエルプストー

私は、昨日の使い魔召喚の儀にて、我が主ミス・ヴァリエールに召喚されました

空雷時 黎と申します そちらの男は平賀 才人  
私と同じ故郷より召喚された使い魔です  
以後、お見知りおきを」

「あら、ルイズの使い魔にしては、礼儀がなってるじゃないの？  
名前は知ってるみたいだけど・・・名乗らせて貰うわね

あたしはキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・ツェルプ  
ストー

キュルケと呼んで頂戴♪」

おお、好感触・・・なのかな？

「ちょっと、レイ！ こんな女に挨拶すること無いわよ！

それに私と態度が違いすぎない！？」

うるさいねー 初対面の人には礼儀正しく！

俺は自己紹介の時は全力で礼儀正しくするの！

黎（執事モード）なの！

「ミス・ヴァリエール 寮の廊下で騒がれては、他の人の迷惑にな  
ります

それに、もうすぐ朝食の時間です 言いがかりを付けていないで、  
お急ぎください」

あくまで、正論しか言っていないぞ？

「・・・・・・・・」



ルイズが怒りを無理やり押し殺した顔でこちらを見てくる

怖えええええええええええ！

で、チラッとサイトを見ると、固有結界を発動させてキュルケの胸をガン見している

いや、チラ見よりむしろキモくは無いが、そろそろ犯罪レベルだぞ、サイト

「あら、あなたが言うめられるなんて珍しいわね、ルイズ」

キュルケがそういうと、怒りに染まった顔をさらに歪ませて言う

「うるさいわね！　そういうアンタの使い魔は何なのよ、虫！？」

何イイイイイイイイΣ（・ω・）ノ

ルイズから、使い魔の話題を振った！？ 何故だ！

俺とあの使い魔を比べさせたいのか！

「フン……ゼロのルイズと一緒にしないで頂戴」

私も昨日、使い魔を召喚したのよ、1発でね

でも、執事ならともかく使い魔にするなら、こういうのが良いわよね。

フレイム、おいで♪」

キュルケは勝ち誇ったドヤ顔で自分の使い魔のサラマンダーを呼ぶ

サラマンダー・・・爬虫類キライです

「ぐぐぐ・・・なによなによ！　自分がサラマンダー召喚したから  
つて！」

ハア、面倒くさいが、拗ねられると余計面倒くさいのでフォローする

「ミス・ヴァリエール　恥じることはありません

そもそもサラマンダーと私達では、系列が違います

それを言うのであれば、竜を召喚した方もいれば、カエルの人だ  
って居るのです

さすがに、カエルよりは役立つ自信がありますよ？

それに、あなたは2人も召喚したのです　これまで、使い魔を1  
度に2匹も

召喚した人がいたでしょうか？

いいえ、いません　それこそ始祖の4人の使い魔依頼の快挙です  
よ」

始祖以来の快挙のところで、ルイズの顔がパアッと明るくなった

「そ、そうよね！　2人も呼んだんですものね！」

そう言って、元のかわいらしい顔に戻ったルイズは、無い胸を張った  
が、それに対抗してキュルケも胸を張る

・・・だめだ、ボリユームに差がありすぎる

ルイズがまた拗ねる前に連れて行こう

「それでは、ごきげんよう ミス・キュルケ」

退散！ 退散！

「ふん、ふん、ふーん♪」

おお、ルイズの機嫌がイイ！

これは、まかない貰わなくても大丈夫かもわからんね

「それにしても・・・」

ん？ なんだ、サイト

「さっきの人・・・胸大きかったなー」

ピキッ・・・・・・・・

その瞬間、場の空気が凍ったことと、サイトが百叩きデストロイヤーOSHIOKI  
を食らったことと、食事がアレなのは言うまでも無い

☆★@★★☆

ちなみに、まかないは昼前まで待てとのことですよ

それで、今は授業を受けるべく教室に来ましたー ヤッハー！

中は大学の講義室って、カンジかな？

ま、俺はなぜか最初に法廷が浮かんだが

さて、周りを見ると他の生徒がクスクス笑ってくる

うむ・・・あれだね、OSHIOKI制裁が必要だね（#^ω^）ピキ  
ピキ

そしてモンモン、お前の使い魔カエルじゃねーか！

笑われる筋合いはねエよ！ 使い魔関連で笑っていいのは今笑って  
ないタバサだけだ！

とか考えているとルイズがイスを引け的なことを言ったので

サイトがイスを引き、席に着いた

俺もルイズの横に座り、ルイズを挟み込む形にする

「ちょっと！ ここはメイジ専用の席なんだから、座っちゃダメ！」

だが断るッ という事で無視ませう

ちなみにサイトは周りの使い魔に興味が出たようで、キョロキョロ  
教室中を見渡していた

さっきルイズにOSHIOKIと言う名の拷問を受けたところなのに  
その立ち直りの早さ、感服いたします。

とか考えていると、先生が教室に入ってきた

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。

私、シュヴルーズはこうして春の新学期に様々な使い魔を見るのがとても楽しみなのですよ。」

そう言って、教室中を見渡す

そして、どうやらサイトと目が合ったようで、微笑みながら言った

「おやおや、ミス・ヴァリエール 珍しい使い魔を召喚しましたね？」

おそらく・・・顔を見るに悪気は無いのだが、その一言により、教室は笑いに包まれた

余計なことをしてくれやがる

「ゼロのルイズ！」

召喚できないからって、その辺から平民連れてくるなよな？」

ルイズは顔を真っ赤にし、立ち上がろうとするもそれを俺が制し、立ち上がる

「お前はバカか？ この左手を見てみる、これが召喚された証だ

それに、コイツの実家はあのヴァリエール公爵家だぞ？

それこそ、その辺から連れてくるんだったらドラゴンに

水魔法でもかけてつれて来るだろ 普通

それに俺達が召喚されたところを見た奴も多数いるはずだが？」

それだけ言って、イスに音をたてて腰掛けた

例に漏れず正論しか言っていない俺、素敵！

周りも静かになったし——とか思っていると、ルイズが突っ込んできた

「・・・そのへんからドラゴンを連れてきたりもしないわよ」

「ああ、すまん 例えだ、例え」

怒らせちゃったかな？ 別にいいが

「でも・・・ありがとう」

What? まさかこの爆発ツンツン桃色娘にお礼を言われるとはな

「コホン！ さて、遅れましたが授業に入りましょう」

シュヴルーズは、咳払いをして無理やり話を授業に持っていた

「私の二つ名は”赤土”のシュヴルーズ。

これから一年、土系統の魔法を皆さんに講義しますわね。

それでは、ミスタ・マリコルヌ、魔法の四大系統はご存知ですね？」

「は、はい ミセス・シュヴルーズ。 火と土、それと風と水の四つです。」

と、答えるとシュヴルーズは満足そうに頷きながら言った

「その通りです。」

今は失われた系統の虚無を合わせて五つの系統があるのは、皆さんも知っての通りです。

その中で土の魔法は最も重要なポジションを占めている・・・と、私は考えます。

私が土の系統を使うから、と言う訳では決してありません。」

シュヴルーズは、そこで一旦区切ると、コホンと咳払いをした

「土系統の魔法は、万物の組成を司る魔法です。

この魔法が無ければ、重要金属も作り出せませんし、加工も出来ません。

石を切り出し、建築すること。

農作物の収穫も今より手間取るでしょう。

この様に、土系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのですよ」

・・・愚かな

俺の知識をフルに使えば純金だろうが混ざり物の無い鉄だろうが取り出せるわ！

農作物の収穫にいたってはコルベール先生のエンジンを発展させて機械を作れば

今よりバカみたいに早くなるぞ？

もとより魔法の中で一番この世界を堕落させているのは『土魔法』だと俺は思うぞ？

そもそも6千年も同じ宗教を信じている時点でこの世界はよくわか

らんがな

大きくなりすぎた組織は、上から腐り始めるもんよ

ブリミル教ならぬブリミル狂・・・ってか！

と、俺の考えがそれているうちに、サイトがスクウェア？  
なにそれおいしいの的な質問をしていた

「その疑問には俺が答えよう・・・魔法は、いくつか属性があつてなさつき言つてた4属性だ　そして、その属性を足せる数で、メイジの格が決まる

例えるなら火、単発だと弱いものでも、火×火にすると少し強くなる

そして、火×火×火、だと更に強くなる、といった具合になちなみに違う属性でもかけられるぞ？

風×風×水々みたいな

そして、4つコレをかけられるものはスクウェア

3つだとトライアングル

2つだとライン

1つしかできないのが、ドットメイジだ」

「ふーん・・・ルイズは何メイジなんだ？」

聞きやがったコイツ

「・・・・・・ドットよ」

え、マジ？　初耳　てつきり1つも出来ないかと思つて　うわなに  
をするやめ（ry



「へー ドットって一番下じゃん」

「う、うるっさいわね！」

「ミス・ヴァリエール！」

「は、はい！」

「おしゃべりする暇があるのなら、あなたにやってもらいましょうかね？」

爆発フラグ k t k r !

「え 私ですか!？」

「そう、ここにある石を、望む金属に変えて御覧なさい」

すると、キュルケが顔を青くして言う

「ルイズ、やめて！」

「・・・やります！」

／（＾Ｏ＾）／オワタ

あ、タバサが教室を出て行こうとしやがった

させねーよ、馬鹿者 という訳で『念動力』で無理やり席につかせる

「!？」

タバサが驚いた顔をする

面白そうなので、紙飛行機をタバサのほうに飛ばす

「・・・？」

こちらをタバサが見てくるので、思いっきり悪そうな笑顔を浮かべる俺

「鍊金！」

キタ——（。△。）——（。△。）——ツ！  
！！！！

ルイズが鍊金をかけた石は、七色に光り輝く

アイネ・フェストウルク  
「壮大なる要塞」

爆発に備え、幾重にも重ねた、目に見えない魔力のバリアを爆心予定地を中心に

半径1メートルほどのところまで張る

ズウウウウウウウウウ

ビキッ・・・パリンパリンパリン！

次々守りが破られてゆき、残り1枚となったところでようやく止ま

った

「（マジか・・・）」

実際強度テストをしたわけでもないからよくは分からないが  
薄く張っただけで箒でぶん殴られても無傷なほどなのに、本気で張  
ったものを

幾重にも重ねたのにもかかわらず、ほとんど破られてしまった

ま、なんだかんだ言って防げたし、よしとするか！

ルイズとシュヴルーズ先生は黒こげだけどネ

「・・・ちよつと失敗みたいね」

「ちよつとじゃないだろ！ ゼロのルイズ！」

「ま、何時もに比べたら被害は少ないけどね！」

誰かがそういうと、教室が笑いに包まれる

「何時も成功の確率0%、ゼロのルイズだもんなく！」

それを聞いたサイトは、俺に話しかけてくる

「・・・なあ」

「何だ？」

「ルイズってさ・・・ドットメイジって名乗っていいの？」

「・・・さあ？」

そんなささやかな疑問を胸に、続く

#### 第4P 決闘ってカンジ!! (前書き)

しょうゆさし「ハッピーバースデー、トゥーミー!

ハッピーバースデーディア俺!」

黎「・・・私にそれを聞かせてどうしろと?」

しょうゆ「なぜに猫かぶり・・・それに、関係なくも無いぞ?」

黎「なぜです?」

しょうゆ「お前の誕生日も今日だ」

黎「何イイイイイイ!?」——コホン、それでは本編始まります」

しょうゆ「流された!?!」



「怒ったら皺が増えますことよ？ ミス・ヴァリエール？」

「うるさいうるさいうるさいッ

アンタ達！ 3日間食事抜きッ

反省なさい！」

チツ・・・だが、シエスタにお願いして飯の経路は確保済みだ

「そ、そんな！」

「諦めろ、サイト ご主人様の命令は絶対だ・・・ほれ、行くぞ」

＊

という訳で、厨房に押し掛けてきた黎君でゝす

ま、今扉の前にいるってカンジだ

「ハハ、どこ？」

サイトが尋ねてくる

ふふ・・・有難く思えよ、サイト

俺の外交手腕によって、うまいと噂のまかないシチューが食えるんだ・・・多分な

息を吸って・・・扉を開けるッ

「こんにちわん♪」

シーーーーーン・・・場の雰囲気が凍る

しばらくすると、シエスタが再起動し、俺が来たと気づいたようだ

「あ・・・レイさん！」

「いよっシエスタ！」

俺は満面の笑みで、手を小さく振り、シエスタに挨拶をした

「おお、アンタがシエスタの言ってた・・・」

「平民の使い魔、空雷時 黎と後ろのが平賀 才人君

主人に飯をもらえないんで、なにか食わせてもらいに来ました！」

大きな声で、元気よく！ 満面の笑みで挨拶をする

サイトは何がなんだか理解できていないようだが、気にしない



「まったく・・・ひでえよな、貴族って奴はよ！  
勝手に召喚しておいて飯も与えないなんて・・・  
俺の名は、マルトー　ここで料理長をやってる  
待ってな、今から飛び切り上手いものを食わせてやるからよ！」

飯だああああ——（。▽。）——ああああああッ！！

☆★@★★☆

そのころ、学院長部屋

「オールド・オスマン！大変です。」

学院長室に、コルベール先生が駆け込む

そこには、威厳ある翁が座っていた

「なんじゃね？」

オールド・オスマンと呼ばれる翁が答える。

「これを見てください！」

そう言ってコルベールは一冊の本をオスマンに渡した。

「これは“始祖ブリミルの使い魔たち”ではないか。

こんな古い書物を調べている暇があれば仕事をしたらどうかね？  
コルベール君 そんなんだから彼女の1人もできないのじゃ」

オスマンがそういうと、コルベールは顔を真っ赤にしながら続けた

「クッ・・・私のことは関係ないでしょう！  
それより、これも見てください！」

そう言って、黎とサイトの手に現れたルーンのスケッチを手渡すコ  
ルベール。

その瞬間、オスマンの表情が一気に変わった。

「ミス・ロングビル。席をはずしなさい」

ロングビルと呼ばれた女性は立ち上がり、部屋の外へ出て行った。  
そしてそれを確認したオスマンは重そうに口を開く。

「詳しく説明するんじゃ。ミスタ・コルベール」

☆★@★★☆

「できたぜ、貴族のあまり物で作った物だが、味は保障する！」

お・・・おお！　これがあの”あまり物シチュー”！！！！

旨そうだ・・・！

生唾を飲み込み、イスに座る　スプーンを持ち、手を合わせる

「いただきます!」

おお・・・ 合わせたわけでも無いのにハモった

だが、そんなこと気にしている場合ではない

まず、一口・・・・・・・・「パク」

こ、これは・・・

これは・・・

「うっ・・・」

「どうかしたか？」

マルトーさんが一言唸って黙ってしまったことに心配してか声をかけてくる

これは・・・

これは・・・

「うまいぞおおおおおおおおお!!!!」

旨すぎて意識が飛びかけた 何コレ!

美食大国日本に生まれながらこんな旨いもの、17年生きて初めてだぞ!?

「うん! 旨い、旨いよ、マルトーさん!」

サイトも感動の言葉をこぼす

それを見たマルトーさんは、満足そうに頷いた

＊

「「ごちそうさま」」

旨かった 本当に旨かった

これは是が非でもお礼をしなければなるまい

黎君は義理深いのだ

「ところでマルトーさん、なにか私にお手伝いできることはありませんでしょうか？」

ぜひ、シチューのお礼がさせて頂きたいのですが・・・」

マルトーさんはしばらく考え込む仕草をして言った

「じゃあ、シエスタの手伝いをしてくれ」

「ああ、俺も手伝うよ」

サイトも間髪入れず言った

さて、何をすればいいのかな？

「どうぞ、ケーキです」

ケーキを配達して回ることを言い渡された 俺は接客は遠慮したかったのだが

「その顔で、その性格・・・まさに接客のために産まれてきた男だろう」

とマルトーさんに言われ

「レイさんは親切ですし、気も回りますからいいと思いますよ!」

とシエスタから援護射撃

「ああ、レイの性格なら人から嫌われることも少ないんじゃないか？嫉妬とかする人がいたら別だけど」

と、サイトに止めを刺される 違う・・・皆、違うよ!

と全力で叫びたくなったが、恩人に言われたことなので従うしかなかった

ちくしょう。。。。

しかしその顔、ねえ・・・もしかしくても俺の顔も改造されてるかもな

すると、横から聞き覚えのある名前が聞こえてくる

「なあ、ギーシュ! お前、今は誰とつきあってんだよ!」

「誰が恋人なんだ? ギーシュ!」

ああ、決闘イベント今日か・・・

その問いかけにギーシュは、人差し指をそつと唇に合わせて答えた

「つきあう? 僕にそのような特定の女性はいないのだ。  
薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

「フ・・・愚かな」

あ、つい口に出た

「む、なんなのだね君は・・・僕の持論に文句でも？」

「失礼ながら・・・たしかに、薔薇は多くの人間を魅了します  
しかし、その優美な香りを嗜むことができるのは  
その薔薇を手にした者 唯一人。

そして、薔薇のトゲにより怪我を負うのもまた、その一人」

「・・・つまり君は、何を言いたいのだね？」

「あなたをその美しき外観だけでなく、優美な香りまで  
欲している、あなたを真に愛する人・・・そんな人をあなたは  
自分自身で傷つけていることにお気づきですか？」

「だから、何が言いたいんだね!？」

ギーシュが声を荒げる

白を切る気か？ この色男（笑）め

「コレのことです」

俺はギーシュのポッケから、モンモン特製の香水を取り出してみせる

「そ、それはミス・モンモラシが自分のためだけに調合している香水!？」

何故ギーシュが・・・!?」

「それは当然・・・ミスタ・グラモンがミス・モンモラシと恋仲にあるからでしょう?」

「違う いいかい? 彼女の名誉のために言っておくが・・・」

「何が違うのです? 自分のためだけ、と公言しているものを渡すこれはたとえ恋中で無いにしてもミス・モンモラシーがあなたを好いていることは確かでしょう?」

それに、受け取るあなたもそのことは重々承知のはず・・・

俺がそこまで言うと、1人の少女がツカツカとギーシュのところまで向かってきた

珍しく金髪や桃色、赤、青などの原色ではない、茶髪の少女だ

恐らく、この子がケティだろう いや、間違いない だって顔がケティだもん

ギーシュの前まで来ると、ケティはボロボロと涙をこぼしながら言った

「ギーシュ様・・・やはり、ミス・モンモラシと・・・」

「違う、彼らは誤解しているんだ 僕の心の中に住むのは君だけ――」

バチンッ!



ケティは、ギーシュが言い訳を終える前に思い切りビンタした

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！さようなら！」

そう言って走り去っていくケティ

その様子を見つめながらギーシュは、引っ叩かれた頬をさすつた  
すると、また一人立ち上がった少女がいる

モンモンだ その顔は怒りと、どこか哀しみに打ちひしがれる顔だ

「モンモランシー。誤解だ。彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをただけだ！」

「森へ2人で遠乗り？ もはやデートとしか考えられないのですが」  
前々から思っていたことを言ってみる

「君は黙っていたま「いいえ、その方の言うとおりよ・・・」お、  
お願いだよ

”香水”のモンモランシー、咲き誇る薔薇のような顔を  
そのような怒りで歪ませないでくれよ僕まで悲しくなるじゃない  
か！」

モンモンは、その言葉を聴き終えると、ワインの中身をギーシュの  
頭にドボドボとかけた

・・・野球のビールかけを思い出す俺はおかしいだろうか？

「・・・嘘つき!!」

モンモンは、それだけ言う走り去ってしまった

シューーン

辺りの空気が凍りついた

ギーシュは、ハンカチで顔を拭くと、やれやれ、といったカンジで  
つぶやく

「あのレディたちは薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

だめだこいつ、救いようがねえ

さて、このままだと決闘を申し込まれる気しかないし、逃げるか

「待ちたまえ」

やっぱり呼び止められましたー、やはー、原作クラッシュだぜー

「君が軽率に、香水の瓶なんかをポケットから出したおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた

どうしてくれるんだね？」

「申し訳ございません　しかし、私にはたしかにミス達の心にも傷がついたでしょうが

むしろあなた様の人間的信用が地に落ちたように見えますが？

それに、二股をかけたあなた様が悪いと存じます」

俺がそういうと、周りが笑いの渦につつまれた

「そうだ、ギーシュお前が悪い！」

ギーシュの顔が見る見る赤くなってゆく

「だ、大体君が僕の話に入ってきたのが悪いんじゃないか！

給士の分際で・・・って、なんだ　君はゼロのルイズに召喚された使い魔君じゃないか

ったく、これだから平民は・・・！」

ほう？　いい度胸だなコイツ？

ちよっとOSHIOKIだな

「・・・ところであなたはミス・ケティと森に遠乗りしたと言いましたね

森に遠乗り・・・危ない匂いがプンプンしますね、この二股変体

野郎」

「な、何イ！？

君はこの僕を愚弄するのか！？」

「真実と、私個人の見解を述べたまでですが？」

「・・・いい度胸だな、いいだろう

君に決闘を申し込む！

逃げることは許さないぞ！」

チツ・・・面倒な サイトに押し付けよう

「いいでしょう しかし、相手をするのは私ではなく、そのサイト君です」

俺がここまで言うのと、サイトが「はあ!？」と声を上げる

「な、なんで俺が!？」

その疑問に、俺は「ハア」とわざとらしくため息をついていった

「君は、親友であるこの俺を見捨てるのか？

殺生な！ かつて、我が村において

そのどんな敵にも向かう勇敢なる事 獣が如し

その万の軍勢をも押し返す強靱なる事 龍が如し

そのすべてを見透かすがごとく技巧なる事 仙人が如し

その敵を翻弄し味方を鼓舞するその華麗なる事 蝶が如し

その剣は山を駆け空を舞い、地を這い敵を裂くと謳われる

史上最強の剣士平賀サイトが、まさか決闘を断るなんてこと無いよな!？」

アドリブで中二なことを言ってみた

今は後悔してい（ry

「お、お前なに無茶苦茶言って――」

バキィツツ

俺はなにか言いかけたサイトに渾身の右ストレートをお見舞いする

「ブヘッ!？」

「貴様アアアアア!」

剣を失いその誇り・剣士の気概すらも失ってしまったと言うのか！  
剣士たるもの決闘は潔く受けるものだ！  
貴様のあの言葉は嘘だったのか!？」

「あの言葉って何ー!？」

「というわけで、ミスタ・グラモン 決闘はこのサイトが受けます」

「な・・・、僕は君に決闘を申し込んでいるんだ！

そこの彼は関係ない!」

ま、そうなるだろうが、俺は引かんぞ？

「なら、この使い魔仲間のサイト君にあなたが勝利したなら、私が決闘を受けましょう

それとも何ですか？ たかが平民に、勝てる気がしないとでも？」

プライド面で煽っておけば、乗ってくるだろう　バカだから

「・・・わかった

では、準備がすんだらヴェストリの広場に来たまえ」

そう言ってギーシュは去っていった

フツ・・・やはりバカだったか

とか考えていると、ブルブルと震えているシエスタが言う

「殺され、ちやう」

「「は？」」

またハモった　なに、俺達　一心同体なの？　なんなの？

「サイトさん・・・殺されちやう！

相手は貴族ですよ！？」

最強の剣士がどうか言う以前の問題です！」

お、信じてくれるのか？　あの適当に作った話

「大丈夫　ドット程度のメイジに負けるサイトじゃないよ　コイツ、強いから」

「なんで俺が巻き込まれてるのかわからねーけど・・・  
あの二股野郎、逆恨みだろ、完全に。  
そんな奴に負ける気はしねえよ」

さっすがサイト！ 普通出来ない負ける気はしない宣言！ そこに痺れる憧れるうゝ！

「じゃ、俺は戦わないから行くけど、サイトは『ひのきのぼう』とかでもいいから、武器を持って行けよ？ さもなければ負けるから」

これは事実だ てかそもそも、動く青銅の鎧相手に素手とか、無理でしょ、常識で考えて

「なんだよ『ひのきのぼう』って！  
そんな都合よく無いよ、武器なんて！」

「大丈夫 相手のミスタ・グラモンに士道でも説いて、鍊金で武器でも作ってもらえ」

俺がそういうと、シエスタが顔をさらに青くして、懇願するように言った

「お願いします、レイさん！  
ミスタ・グラモンに謝ってください！  
あの方なら、まだ許してくれると思います！  
ですから・・・！」

「・・・なあ、サイト もしお前が俺の立場だったら謝るか？」

俺は自分が答えると『ハイ、ワカリマシタ』と言ってしまいそうなので、サイトに振る

上目遣い涙目、破壊力強すぎだ・・・グフツ

「俺だったら・・・謝らねーよ　お前が戦いたくないってなら別だけどな

悪いのは全部アイツだし　それに、貴族がどうか、メイジがどうか

いい加減、ムカつくんだよ！　この奴等は、事あるごとに平民だ貴族だ・・・

まったく、意味が分かんねーよ

そんなに魔法が使えるのが偉いのかよ！」

「・・・だ、そうだ

もちろん俺もそんな感じだ

だから、シエスタは黙って見てろ！

二度と皆が平民だなんだと差別できないように快勝してやるからよ！

・・・・・・・・・サイトが」

「やっぱり俺なのね？」

もちろんさ★

よし、広場へGO！

☆★@★★☆

ざわ・・・ざわざわざわ

こっそり決闘のはずなのに、なぜこんなに生徒が来た？



わざわざこんな日の当たらない広場に來た意味無いじゃないか

「ちょっと！　なんでこんなことになってるわけ！？」

と、今は現在進行形でご主人様に尋問されているところであ

「これは・・・ふむ、仕方なかったのです」

「なにがどう仕方がないのよおおお！？」

仕方がないから仕方がないのだよ、ルイズ・・・と、言うことで無視することにして

広場全体を見渡す

・・・見渡す？

あれ、俺こんなに背高くなかったよな・・・アレ？

そーいや俺、サイトよりさっき背高かったな

サイトの身長は、確か・・・172cm　あれ？・・・あれ？

ま、気にしない　どうせ改造されてるんだろ

俺は広場を見渡した　ふむ、キュルケ、タバサ・・・くらいかな

確認できるのは

モンモンもひよっとしたら来てるかもしれないが、見つけられる位置にはいないのだろう

と、サイトが広場にやって来た。その手には、棒術に使うような棒が握られている。

どこから持ってきたんだろ・・・

サイトの手は、もうすでにガンダールヴの光が輝いている。

瞬殺ですね、わかります

「君には悪いが、早く決めさせてもらおうよ  
僕の二つ名は”青銅” ゆえにこのワルキューレがお相手をするよ！」

ギーシュはサツと薔薇の杖を振り上げる

すると花びらが舞い、木偶人形ワルキューレが7体、出現した

いきなり全力かよ・・・

「魔法か・・・面白いな」

サイトが余裕綽々といった表情で棒をクルクル回している

「その余裕、何時まで続くかな！」

ワルキューレ！ とギーシュが叫ぶと、7体の木偶人形がサイトに向かって突撃をした

ブンッ！

空気を裂き、木偶人形の人間離れしたパンチがサイトの顔に当たった

「!？」

かのように、見えた

「(遅い・・・)」

サイトは木偶人形の攻撃をすべて華麗に避けている 木の棒で青銅を砕くのは不可能と判断したのか、木偶人形の間を駆け抜け、瞬時にギーシュの目の前まで移動した

そして、棒をギーシュの首元につきつけた

「・・・まだやるか？」

サイトが言うと、広場が歓声に包まれた・・・

☆★@★★☆

「ミスタ・コルベール？」

「なんでしよう、オールド・オスマン」

ここは学院長室

二人は今、虚無の使い魔、ガンダールヴが決闘をすると聞きつけ  
ヴェストリの広場の様子を見ていた

だが、勝負はあまりにも1瞬でついてしまった

「勝って・・・しまったのう」

「ですねえ・・・」

・・・だが、なんとミスタ・グラモンは突如ワルキューレをもう一  
人のガンダールヴ

空雷時少年に向けた あまりにもいきなりの出来事であった

☆★@★★☆

「僕が・・・」

ギーシュが何かつぶやく なんだ？

「僕が負けるかアああああ！！」

なんと、ギーシュはこちらにワルキューレを向けてきた

「うむ・・・その闘争心、評価に値する」

だが・・・と、一区切りおく　すると、ワルキューレの拳が  
黎の右頬に食い込んだ

「レイッ!!」

ルイズが悲鳴を上げ、ギーシュはほくそ笑む　だが・・・その笑顔は  
一瞬にして崩れ去った

「こんな木偶人形ガラクタで・・・勝てるわけ無エだろツオオオオオオ!!」  
!!」

黎は右手に青白い魔力を纏わせ、蚊でも払うかのように  
ワルキューレを粉碎する

そしてすぐ前にいたワルキューレには返す右腕で殴り飛ばす

そして少し離れたところにあるワルキューレの内側に足に魔力を纏  
わせ

瞬時に移動する

両手に魔力を纏わせ、スツと前に突き出す、  
すると残りの5体すべてを巻き込み、前に吹き飛ばす

「波!」

そして、突き出した腕から追い討ちと言わんばかりにエネルギー波  
を撃ち出す!!

ズドオオオオオオオオオ！！

エネルギー波は、火柱を上げ、ワルキューレを完全に消滅させていた

やりすぎたZE★

続く

## 第4P 決闘ってカンジ!! (後書き)

### 次回予告

キュルケ「あなたは・・・私をはしたない女と思うでしょうね」

黎「・・・・・・・・（何故に、俺？）」

タバサ「あなたの力は・・・面白い」

黎「（また面倒くさい人に・・・）それは、どうも」

ルイズ「あなた達、武器を買いに行くわよ!」

次回『インテリジェンス武器ってカンジ?』

**第5P Nice boat・・・ってカンジ? (前書き)**

また予告と違う・・・orz



## 第5P Nice boat・・・ってカンジ？

こんにちは 空雷時 黎です

今、私は先ほどのエネルギー波を出した場所で硬直しております

で、硬直していると言えは 周りの観客、ミスタ・グラモン、サイト、そして

ミス・ヴァリエール・・・少しやりすぎたでしょうか？

ん・・・？ ああ、この話し（考え）方のことですか

『俺』であつたら、恐らくこの状況なら思考が停止していたでしょうが・・・

とつさに冷静な『私』になることで思考を繋ぎ止めました

所謂 黎（執事モード）とか、猫かぶりと言う所ですね

ざわ・・・ざわざわざわ

と、周りの観客達が騒ぎ始めました

大方私のエネルギー波が魔法に見えて『平民が魔法を』  
のような話でもしているのでしょうか・・・どうでもいいことです

ですが、このままだと話が進展しなさそうなので  
ミスタ・グラモンに一つ、二股の末路でも説きますかね

「ミスタ・グラモン・・・少し昔話をさせていただきます  
昔、あるところに二股をした青年がおりました  
その青年は、見るも無残な末路をたどりました・・・」

私が言うと、ミスタ・グラモンは突然のことに驚きながらも、頷きました

ふむ、そんなに続きが聞きたいのですか

「簡単に言えば、腹を包丁でメッタ刺しにされ、最終的には・・・  
斬首

人、これをNice boatと呼びます」

うつ・・・と、ギーシュは黎の言葉に顔を歪ませた

「人間は、2人を同時に愛せるほど、器用ではありません  
そして、自分の愛するものが、自分を愛しながら他の誰かを愛する  
これを許せるほど寛大でもありません 先ほどのあなたの反応を  
見るに

ミス・ロツタ（ケティのファミリーネームですね）ではなく  
ミス・モンモランシーを真に愛しているように感じました  
ご自分に素直に生きるのも結構ですが、行き過ぎると結局は  
あなた様自身の首を絞めることになってしまいますよ？」

私の人間講座を聞いたミスタ・グラモンは、なぜか尊敬の眼差しで  
此方を見ていますが・・・

なんなのでしょうか？

「ミスタ・レイ・・・あなたは、なんと美しい人だ・・・」

なっ・・・！？

杖が薔薇かと思ったら、もしや性癖も薔薇！？

私が内心汗ダラダラで事の成り行きを見守っていると  
ミスタ・グラモンが続けて話します

「それほどの力があるのにもかかわらず、決して奢らず、ルイズの  
使い魔に降り

貴族には礼儀を持って接する　そして、いつも折れることの無い  
その誇り高き信念・・・！

この、ギーシュ・ド・グラモン一生あなた様について行きます！  
！」

何イ！？・・・コホン、取り乱しました

「ミスタ・グラモ「ギーシュと呼んでください！」・・・ではギー  
シュ

あなたに命じます」

私が言うのと、ギーシュは犬のように目を輝かせ、跪きました

「なんなりと！」

・・・いくら四男でも、元帥の息子が平民に跪いてよいのでしょうか？

「ミス・ロッタ、それからミス・モンモランシー・・・彼女達と話を付けてきなさい

自分が本当に愛しているほうには、あなたの思いを  
そうではないほうには、誠心誠意の謝罪を述べて来なさい」

ま、筋は通すべきでしょうな 貴族として 男として 人として、  
必要なことです

「え・・・で、でも、その どの顔して会えばいいか」

ふう・・・彼女らは薔薇の意味をうんぬん言っていたわりに  
一応気にはしていたのですね

その八つ当たりが決闘・・・貴族は面倒くさいですね

「それでも、です

どうしても無理だというのなら、私が付き添います」

ま、一応医術を詰め込まれたので、心のカウンセリングも出来るつもりでいます

ミス・モンモランシは、ギーシュの本命なのでどうでもいいんだよ  
このJKという感じですがミス・ロッタは捨てられたと言っても  
過言で無い状況ですからね 可哀想過ぎます

慰めてあげるのもいいでしょう 原作にも殆ど出ていませんでした  
しね

それに実は好m・・・ロリコンでは決して無いのですよ？

「おお、どこまで心のお広い方だ・・・有難うございます  
2人に、謝りに行きたいと思います」

「よろしい、それでは今から誰かー！ 水メイジ、水メイジを呼んでーッ！」・・・え？」

ルイズの叫び声がしたほうを見ると

特に活躍をしていないサイトが原作通りブツ倒れています

・・・殴られてもいないのに、なぜ？

ま、一応医学の心得があるので見に行きますか

・・・これ は ひ ど い

体中打撲の後が・・・それに、腕があらぬ方向に曲がっている

「ミス・ヴァリエール・・・？  
なぜ、サイトはこんなことに？」

私が問うと、ミス・ヴァリエールは間違えてゲームのデータを  
初期化させてしまった子供のように――

分かりにくいですね、涙を少し目にためながら話し始めました  
「コイツが、私の部屋の家具を壊したから、躰をしたんだけど  
やりすぎちゃって・・・」

なるほど、まったくわからん

ですが、この折れ方を見るに関節技を本気でかけたようですね

折れるのも道理です

「ふむ……誰か！！ 水メイジの方アあああああ！」

脱臼程度ならサクっと直せますが、骨折となれば私に出来ることは無いので

水メイジの方に協力を得るしかありませんからね

でも、水メイジですか……原作キャラがミス・モンモランシくらいしか思いつきませんね

ここは医務室に直行か、二つ名が天才のスケベジジイに頼めば何とかなるかもですね

そもそも鏡で監視していながら、決闘を黙認、その結果公爵家の使い魔が重症となれば

さすがにあの爺さんも重い腰を浮かすというものでしょう

と、冗談を言っているわけではありません

そもそも骨折しているのに喘ぎ声一つ無いのはなかなか危険です

医務室直行ルート固定ですね

「サイト、サイト……意識をしつかり！」

・・・つたく、ギーシュ、手伝いなさい！  
サイトにレビテーション！ 医務室に運びますよ！」

☆★@★★☆

「サイト・・・金のかかるものを随分使わせてくれましたね？  
水の秘薬6本・・・ま、ヴァリエールの財力に言わせればなんと  
も無いでしょうが」

私がそういうと、ルイズが先ほどとは違った感じで目に涙を溜めな  
がら叫ぶ

「なんともあるわよ！ うう、生活費があ・・・」

ふむ・・・金を頂くついでに、ミス・ヴァリエール・・・カトレア  
嬢の診察に  
行ってもいいでしょうね あと、私は動物（爬虫類以外）が大好き  
なので  
ムツゴロウ王国と揶揄される彼女の部屋に遊びに行きたいなー、な  
んて下心もあります

「それもこれも、このバカ犬が悪いのよ！」

「何ですか！？」

怪我をさせたのはこの娘なのでは・・・ま、小さなことです、うん  
使い魔だから仕方ない…便利な言葉です、うん

「ところで家具を壊したと言っていましたか 何を壊したんですか？」

「私の上着とか、帽子をひっかけるアレよ」

ああ、アレですか・・・それで棒なのですね

それにしてもな、よりにもよってミス・ヴァリエールの部屋から借用したんですか

サイト・・・君は実にバカですね

「ふう・・・ギーシュ、このバカは放っておいて、謝りに行きますよ」

「・・・はい」

うむ、素直でよろしい      まずは、ミス・モンモランシーですね

☆★@★★☆

コンコン

ドアをノックします      ですが、返事がありません

ただのしかばねのようだ・・・では無く、出てくれませんかね

「モンモランシ！      モンモランシ！      謝りたいんだ、出てきてくれ



「っ」

「ギーシュ、声大きいです」

君も実にバカですネ？

ここは女子寮ですよ？

あなた、このままだと確実に変体認定ですよ？

仕方ありませんねえ・・・

「仕方ありません、ギーシュ アンロックです」

私が言うと、ギーシュは『それはさすがに・・・』って顔になりましたね

「仕方ないでしょう？

そもそもあなたが女子寮に入っている時点でアウトですから  
それにミス・キュルケもアンロックなんてサクサク使っていますし、構いませんよ」

「で、ですが・・・」

「いいですから、早くしないと扉をぶち破りますよ？」

「は、はい！ アンロック！」

ギーシュが薔薇を振りかざすと、ドアがカチリと音を立てました

さてギーシュ君、これで引くに引けなくなりましたよ？

「それでは・・・言っていないませんでした、コノ交渉が失敗すれば単に女子生徒の部屋に禁止された魔法を使って押し入った変体ということになりますから、気張っていきましょう、ギーシュ」

「そ、そんな！」

ギーシュがこの世の終わりのような顔をしますが、平気ですよ・・・多分

「大丈夫、大丈夫！ 誠意が伝われば許してくれますから、ね？」

という訳で突入ですね・・・って、うわ！

「これは・・・酷いですね」

フラスコやらなんやらが、あちこちに置いてあります

カオスですね それもこれも貧乏が悪いのですよ、多分

「ミス・モンモランシは・・・いない「何をしているのかしら？ ギーシュと使い魔さん？」

と、部屋の入り口にはスーパーサイヤ人顔負けの怒りをおびたミス・モンモランシが

仁王立ちをしています・・・（つム）

「最悪のシナリオです、ミスタ・グラモン

あなたは一生変体の汚名をかぶることでしょう」

「ちょ、師匠！ 諦めないでください！」

「なんですか、師匠って あなたのような変体を弟子に持った覚えはありませんよ」

「アンタの指示でしょうがああああああ！」

「いいから出て行けええええええええええ！」

あーあ・・・仕方ありません、ここはとにかく彼の気持ちを伝えるしかありませんね

「ミス・モンモランシ ミスタ・グラモンがあなたに伝えたいことがあるそうです」

「お断りだわ」

私が言いますが、1瞬で返されました

仕方ありませんねえ・・・本当に世話がかかる ん？ 私のせい？  
フツ・・・

「お願いです！ 話だけでも！！」

ガンッ 私は地面に這い蹲り、頭を下に打ち付けます

「ちょ！？ あなた、なにしてるの！？」

「し、師匠!？」

必殺DOGEZAです 此方の世界に無い風習なので2人とも居た堪れない気持ちになっているようです

そりゃ、地面に這い蹲って頭を打ち付ければそうなりますね

私がDOGENZAで硬直して約5秒、この間が異様に長く感じました  
すると、根負けしたかのようにミス・モンモンラシがため息をつきました

「はぁ・・・分かったわよ、話だけなら、聞いてあげる」

「感謝します!・・・ギーシュ」

早くなにか言いなさい 私にもプライドがあるのです

DOGENZA体勢をずっと続けるのも結構つらいのです

「モンモンシ・・・ああ、今更こんなことを言うのもどうかと思う  
だが、言わせてくれ

僕には、君しかないんだ!

他の女性とは、違うんだ・・・君じゃないとダメなんだ!!」

ギーシュは、何時ものように臭いセリフを撒き散らすわけでもなく、それだけ言っと

伝家の宝刀DOGENZAを軽々と繰り出しました

さて、もう一押しですかね？

「ミス・モンモランシ・・・ギーシュは、あなたの知るとおり無節操な男だ

ですが、あなただけは、本当に特別なんです

ギーシュとよりを戻せとは言いません 唯、友人としてでもいいのです

ギーシュに、もう一度だけ、チャンスを与えてくれませんかでしょうか・・・？」

一応ここは私の本音で締めておきます

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

へんじがない、ただのしかばね・・・・・・・・今はそんな空気ではありませんね

「わかったわよ・・・・・・・・使い魔さんに免じて、あの1年生のことは許してあげる」

ミス・モンモランシが言うと、ギーシュの顔がパアッと明るくなる

「ま・・・一部屋に入っただけだね《・・・・・・・・・・・・・・・・》」

・・・さて、どうしましょうね？

☆★@★★☆

なんだかんだでギーシュだけ置き去りにしてしまいました

・・・南無

とうか、何故ミス・モンモランシの部屋の場所を知っていたのでしょうか？

やはり変体・・・いえ、もう気にするのはやめましょう

さて、では仕方が無いので私だけでも、ミス・ロッタに謝りに・・・  
もとい慰めに行きますかね

「と、言っても場所がわからないのですが」

方向音痴ここに極めりの私が勘でいこうものなら、この寮を爆発させてしまいかねません

うーん・・・生徒に聞くのが一番なのでしょうが  
1年と2年と3年の区別なんてつきませんし・・・

あ、そうだ　メイドさんに聞けばいいのでは？

ちょうど、そこにメイドさんがいることですし　ご都合主義万歳です

「え・・・ミス・ロッタの部屋ですか？

それはですねー」

と、知っていたようですね　大成功です

ふむ・・・けっこう近かったんですね？

という訳で合鍵ギーシュがないので、ノックしまくって出なければ・・・

うん、ぶち破ります

と、さっきのように中にいないという事態のために、魔力をうすく全方位に出します

魚群探知機の要領ですね技の名を”魔探知”とでもしましょう

・・・あ、いますね、中に一人

というわけで、ノックをしながら声をかけます　できるだけ、優しく、優しく

「ミス・ロッタ？・・・出てくださいますか？」

・・・返事がありませんが、やはりショックだったのでしょうか？

ですが諦めません　良い子強い子泣かない子です

16歳の子が、失恋ごときで泣いてはいけけないのです

コンコン・・・コンコン・・・コンコン

「・・・・・・・・どなたですか」

と、やっと返事がありましたね　ですが、大変弱弱しいです

原作ではどうやって立ち直ったのでしょうか・・・あ、出ていませんね

「ミスタ・グラモンと決闘をした者です・・・お知らせがあつてきました」

私が言うと、彼女はドア越しに聞いてきます

今だから許しますが、そうでなかったらそんな横着をしたらドアごと吹き飛ばしますよ

「お知らせ・・・とは？」

「ミスタ・グラモンが・・・死亡しました」

正確にはこれからミス・モンモランシに殺されそうなのですが

「・・・ッ　ギーシュ様が・・・・・・・・死んだ？」

おーっと、予想以上に聞きましたね　ま、返しも用意してあるのでいいですが

「はい・・・精神的意味で、ですがね」



私がそういうと、ドアを少し開けて尋ねてきます

「それは・・・どういう意味ですか？」

かわいいですね・・・で、なくて

「彼は、二股がばれて精神的に不安定だったのです

そこで、その精神を安定させるため・・・少しでも現実から目を背けるために

決闘を行いました その決闘が終った今、彼は現実に打ちのめされています

ミス・ロッタ ギーシュは今、どうしても外せない用事があるのです

どうか、彼を・・・赦してやってはくさいませんか？」

あと、少し開いたドアは閉まらないように念動力で完全に固定です

「・・・・・・・・グスッ」

おーっと・・・・・・・・泣いてしまいましたね

ドアをこじ開けると、同時に彼女は座り込んでしまいます

「ヒック・・・グス・・・ギーシュ、様・・・グス」

どんな口説き方したらこうなるのですかギーシュ！

これ、私にどうしろと！？

まったく・・・世話のかかる弟子ですね

「ミス・ロッタ・・・いいえ、ケティ

顔をあげなさい ミスタ・グラモンは確かに君を誑かしたのかも  
しれない

でも、悪気があったわけではないんです（余計にたちが悪いです  
が）

こんなことを言うのは、自分勝手だと思うでしょうが、どうか彼を  
ギーシュを赦してやってください」

「グズ・・・うえっ・・・ううううううえ  
———！？」

泣き出しそうだったので・・・つい、抱きしめてしまいました

可愛いほそれだけで魔法使いといいますしね（↑

「な、な・・・なにを！？」

「あなたの心の傷は、私が直します

あなたの心の穴は、私が埋めます

あなたの心の叫びは、私が聞きます———ですから  
もう、泣かないでください」

背中を撫でながら言うと、彼女は黙り込んでしまいました

「・・・・・・・・・・ありがとうございます

あの・・・お名前は？」

「空雷時 黎・・・レイ、とでも呼んで下さい」

「レイ・・・ありがとう」

彼女は涙をぬぐうと、初めて笑顔を見せました

その微笑は、見るものすべてを魅了したでしょう・・・けっして口  
リコ（ry

「自己紹介が遅れましたね

私はケティ・ド・ラ・ロッタ 二つ名は”燠火”  
火のラインメイジです」

なんと、ラインですか ギーシュはドットなのに

「では改めてよろしく、ケティ」

「はい！」

やはり・・・可愛いですね

「それでは、ギーシュの命が危険そうなので、今日は引き取らせて  
もらいます

また今度」

「はい、ありがとうございました」

礼儀もあるし・・・まったく、ギーシュはこんない子を誑かして  
少しOSHIOKIですね

☆★@★★☆

「・・・前言撤回です

大丈夫ですか？ ギーシュ」

モンモランシの部屋に行くと、あまりに見るに耐えない、執筆する  
のおおぞましい  
ギーシュの姿がありました

「グ・・・フ」

ほとんどNice boatじゃねーか、という突っ込みは無しに  
して・・・ま  
水のラインですから、ミス・モンモランシがいればなんとかなるで  
しょうか？

「ああ、使い魔さん、ギーシュを引き取ってもらえるかしら？」

「あの・・・出来れば治癒をかけてくれれば」

私が言うと、ミス・モンモランシは肩をすくめ、首を振りました

「無理よ・・・もう、精神力がほとんどないわ  
すぐにでも・・・休みたいくらいにね」

何故！？

「な、何故ですか!？」

「殴って、回復させて・・・って繰り返してたのよ  
もうだめ・・・今はコモンマジックも使えない気がするわ」

「・・・わかりました では、ごきげんよう」

ギーシュ・・・君は、漢ですよ

続く

**第5P Nice boat・・・ってカンジ? (後書き)**

黎「作者、あなたはもう次回予告をやめなさい」

しょうゆ「っせーな!!」

GWの宿題が何一つ終わってないんだよ!」

黎「知りません 自業自得です 死になさい」

しょうゆ「ひでえ!」

## 第6P 大豆!大豆!ってカンジ?

どうも、空雷時黎です

今、私は医務室にギーシュを押し付けて、ルイズの部屋に戻ろうとしたのですが・・・

大きな頭に邪魔されて通れません

「きゅい」

「・・・・・・・・」

「きゅい、きゅー、きゅきゅい」

「・・・・・・・・(汗)」

「もう!! いいからついてくるのね!」

「あ、結局話すんですね」

ミス・タバサの使い魔 シルフィードに邪魔をされてどこかに誘拐されています

「・・・自分で歩くので、話してもらえますか?」

今、銜えられているんですね・・・服はこれ一つしかないのだから出来れば離してもらいたいです

「わかったのね 早くついてるのねー」

急がないとお肉がもらえないのね!」

肉で釣られたのですか・・・あの長門<sup>タバサ</sup>さんは  
韻竜をなんだと思っているのでしょうか・・・?

と、案の定誰かの部屋の前（恐らくミス・タバサ）に到着しました

あ、ちなみに部屋の前と言っても、建物の中ではありませんよ?

シルフィードが入れませんし・・・今、結局銜えられて窓の前に突き出されています

「レビテーション」

と、レビテーションで部屋の中へ引きずりこまれました

・・・小さい 私より頭2つ3つ分は小さいですよ、この子

ああ、この小動物のような外見・・・癒されます

「それで・・・なにか御用ですか?

ミス・タバサ」

「・・・名前」

「ああ、私の名前は空雷時 黎です」

「違う、私の名前」

と、ミス・タバサは私の首元に杖を突きつけて来ます



ああ、怪しんでいるのですか・・・

「ああ・・・ミス・ヴァリエールに聞きました  
随分身長が低いようなので」

「・・・キュルケは？」

彼女の名を知っていたことも怪しむのですか・・・今朝のことなのに、情報が早い

「・・・、胸が大きいようなので」

苦しいですが、これで逃げ切るしかありませんね

だってあの方胸と赤髪以外に外見の特徴無いじゃないですか・・・

すると、ミス・タバサは納得したような顔（ほぼ変化ないですが）  
をして杖を下ろしました

「あなた・・・何者？」

「いきなりですね」

「青銅のワルキューレを素手で碎くなんて、人間には無理」

「・・・一応、まだ人間やってます  
使い魔ですけど 恐らくはこの”ルーン”の効果では？」

左手を見せながら言うと、タバサはルーンを食い入るように眺める

「そう………」

それだけ言うと、肉塊をポイとシルフィードのほうに放り投げ、本を読み始めました

シルフィードは肉を貰うと「キュイ！キュイ！」と言って（鳴いて？）

どこかに去っていきました

……私はどうしたらいいでしょうか？

「おもしろいですか？ その本」

「……ユニーク」

長門さんですね、本当に有難うございました

「ふむ……何という本で？

私、字が読めないもので」

「……エルフと、とある国の王女の恋の物語

異端審問にかかってこの間ほぼすべて燃やされた本」

「……ユニークな本なのですか？ それは」

「発想がユニーク」

「そうですか……」

・・・・・・私は帰ってもいいのでしょうか？

ま、もう少し話してみましよう

追い返されないということは、そこまで迷惑に思っていない・・・  
と思いますし

「本は好きですか？」

「（コクリ）」

私が質問すると、本から目をそらすことなく頷きました

本当に本が好きなのですね

「ミス・キュルケとは、お友達ですか？」

「親友」

「左様で・・・」

親友と明言する・・・なかなか出来ることではありませんね

かわいい・・・ああ、ナデナデしたい

「エア・ハンマー」

「つとおおお!？」

撫でようとしただけでそれですか！

ふふふ・・・だが落としくい砦ほど落とす価値がある

いつか絶対撫でてやります

「・・・・・・・・何？」

「いえ・・・では、今日は失礼します  
なかなか楽しかったですよ」

と、一言残して外に出ますが・・・

「ふむ・・・ミス・ヴァリエールの部屋が分かりませんね」

はぁ・・・メイドさんいませんし・・・また気合で探すしかありませんね

☆★@★★☆

どうも、黎です　もう諦めて厨房で料理でもすることにしました

ついでにシエスタさんをお願いして道を教えてもらえばいいのです

はあ・・・場所、覚えられません 厨房はなぜか覚えられたのです  
が・・・

「失礼します」

厨房に入ると、マルトーさんが開口一番叫びました

「おお！ 皆、英雄が現れたぞ！！」

おおおー！ 皆さんが雄たけびを上げます

「・・・この騒ぎは、何事で？」

私がそういうと、マルトーさんが肩を組んできます

「ガハハ、もちろんお前と、もう一人の青年が貴族を倒したことだよ！」

ああ・・・ま、薄々分かってはいましたが

「私は何もしてはいませんよ

身にかかった火の粉を払ったのみ

真の英雄はサイトの方でしょう

貴族と平民という圧倒的な力の差を恐れずに戦いを挑んだのです

私は彼の魔法がワルキューレを使うもので

さらにそれ以外魔法を同時行使が出来ないものと分かった上で戦ったのです

その一方サイトは、相手の魔法の属性・力量・・・

メイジのランク以外一切の手がかり無しの状態で戦ったのです

戦いは、力ではありません 情報ですその勇氣、まさに英雄でし

よう」

ま、この理論で言ってしまうえば私は大体の相手の手の内を知っているのですから

ほぼ無敵になりますかね

と、マルトーさんは俯き、拳をプルプルと震わせています

・・・なにか気に触った「見たか！ お前らア！！ 真の達人は実力を誇らない！」

「・・・ところで私は、少し厨房を貸していただきたく来たのですが」

すると、マルトーさんはあらかさまに「え？」みたいな顔をしました

「料理するのかい？」

「ええ、私は東方のほうから召喚されたのですが、故郷の料理が恋しくなりました

真似事でもできれば・・・と思ひまして」

本当はタルブの町の醤油があればもうそれだけで昇天なのですが

さすがに醤油は時間がかかりすぎて作れ無いのですよねー・・・

精霊でも無理やり召集して発酵を促進するとか、無理ですかね？

ま、それはともかくまず大きな問題として米が無いんですよね・・・

米があればタルトにアイスにパン、御餅、工業製品ならノリにまで利用できる

というのに、何故・・・あ、気候的にあいませんか、ソウデスカ

「ふうむ、武道の達人は料理まで得意と！」

「まあ、そこそこに出来るつもりです

食材は、何か使っているものはありますか？」

「おう、たしか貴族のあまりものが・・・」

マルトーさんは食材をあさり始めました

「おう、これ使っているぜ」

と、出てきたのはマメといくつかの野菜クズでした

マメは・・・大豆ですかね 豆腐でも作りましょう

野菜クズは・・・野菜炒めでも作りましょうかね

「ちなみに、このマメだが、たまたま東方から来たもので

見たこと無いものなんだが・・・お前さん、何か知ってるかい？」

あ・・・ハルケギニア、大豆無いのでしたね

だからタルブの醤油は魚醤（魚のお醤油）とか聞いたことがあります

「ええ・・・私の国では、とても有効に使われているマメでして

大豆といいます そのまま食べてもとても栄養があり  
別名”畑の肉”と呼ばれています」

「畑の肉・・・ほう」

「そのため、動物を食べられない者・・・あ、わが国の宗教は  
主に3種あって、一番古くから推奨されてきた”仏教”という宗  
教を信ずる

神に仕える者たちがいるのですが、その者たちは殺生を禁じられ  
ています

ゆえに肉も魚も食べられません なので、必然的にこの

”畑の肉”を使った調味料や料理が発達しました

今から、その今日はとりあえずこれの加工品の1つ”豆腐”を作る  
下準備をしておきます おいしいですよ これは分かりやすく言  
えば

マメで作るチーズですね」

「ほう、マメチーズか・・・」

他にも、がんもどき等も作りたいですね・・・ちなみに、豆腐チヨ  
イスの理由は  
すぐ出来るから・・・これが一番ですね

ところで木綿豆腐がいいのですが、木綿・・・あるのでしょうか？

ま、いいでしょう

☆★@★★☆



さて、出来ました ついでに豆腐の仕込みも終わりましたし、明日作りますか

「さ、食べてみてください 我が祖国 ひのいずるくに 日出国ジパング風野菜炒めです」

「おお・・・こりゃ旨い！」

「本当、おいしい！」

と、いつの間にかいたシエスタにも好評です

「でしょう？」

簡単に出来ますし、オススメですね」

「ああ、これは貴族に出してもいいかもしれないな・・・」

ええ！？ あまり物で作った野菜炒めが！？

それ、ちゃんとした料理作ったらどうなるんですか

・・・ま、いいでしょう 少し疲れましたし、帰りましょう

「さて、では私は部屋に帰ろうと思います

あ、大豆は水に浸けたままにしておいてくださいね」

それだけ言い残して、私は部屋を去りました

「んー・・・困りましたね」

結局迷ったとさ

続く

## 第6P 大豆!大豆!ってカンジ? (後書き)

黎..ちなみに私が木綿豆腐を作りたがっているのは  
油揚げも作ろうとしているからです  
絹ではうまくいかないらしいですね

作..らしい・・・とは?

黎..神に入れられた記憶に書いてあるだけですから

作..書いてある・・・て、どゆこと?

黎..某禁書目録の魔道書的な?

プリントに写真と文が乗っている感じのものが  
大量に記憶されているんです

作..めんどくせえW W W W W W W

黎..いえ? 経験もあるので、じっくり思い出さなくても  
自然と手が動きました

箸を持つとき、いちいち持ち方考えないでしょう?  
それと同じですよ

作..ふうん・・・ところで、お前のキャラはそれで固定か?

黎..いえ・・・時が来たらまた『俺』になるかもしれませんよ  
基本、『俺』は戦闘時になるんです

作..じゃ、なんで最初『俺』だったんだよ

黎..異世界に来て、テンションが戦闘時みたいなことになってたんですね

作..へ..

## 第7P 一軒屋ほしいってカンジ? (前書き)

※ 今回、前半はとも見苦しいですが(後半は、まあ普通に拙い)すべては

黎の睡眠不足のせいです 見捨てないでー!

キャラ紹介

ステイルⅡ マグヌス

禁書のキャラ 多分皆知っている 知らなきゃ検索して

主な特徴 赤毛 イケメソ

長身 右目付近のバーコードっぽいの

## 第7P 一軒屋ほしってカンジ？

おはこんばんちわ 黎です

あの後死ぬ気で部屋にたどり着いたのですが、ミス・ヴァリエールに謎の折檻を受け、すぐに逃亡、結局また眠れず仕舞いです

ま、喚いていた内容を聞く限り、『メイドのところに何しに行っていた』

だそうです、問答無用で鞭で殴りかかってきたので逃げました

さて、今ヴェストリの広場にいるのですが、昨晚エルフの女性の方が箒で

飛んでいたのを見つけたんですね

ちょっと今日も探してみましようか

「魔探知」

空に向かって出します

あ、見つけました 彼女かどうかは定かではありませんが  
遥か上空8千メートルを時速950kmほどで飛行している小さな  
反応が・・・って  
すぐ止めないと通り過ぎてしまいますね

やむおえません、強硬手段です

「かめはめ波」

なんの捻りも無く、空に普通のエネルギー波を打ち上げます

さて、どう出るか「ドカアアアアアン」・・・今日も爆発しました  
それにしても『魔探知』が便利ですね 戦いにも大いに役立ちそう  
です

ですが常に魔力を出している上に神経も結構磨り減っていくので  
使用時間が短いのが問題ですね

「おい・・・貴様」

ですが、これ以上膜を薄くしたら効果が無いんですよね

これ以上もダメ、これ以下もダメって感じですし

でもまさか技の開発に工業知識が生かされるとは思っていませんで  
したね

「おい・・・！」

あ、逆転の発想でむしろ膜を強くして攻撃に使えば、全方位の敵を払えますね

「おい、と言っている」

あ、だから魔力が足りないんですよ・・・鍛えれば増えるのでしようか

「よし」

と、今まで何時の間にか私の側にいた独り言を言っていた女性は突如声を落ち着かせて言い切ると箒を私に向けて言い放ちました

「――死ね」

「お断りします」

瞬間、無数の光の矢が箒の先から黎に向かって飛ぶが魔力で魔法陣の形をした壁を張りそれを防ぐ

「防ぐな 死ね」

「嫌です ったく、無傷なんですからゴチャゴチャ言わないでくださいよ」

どうやって防いだのかは知りませんがね



「黙れ！！ 無傷だから3度もチャンスをくれてやったのだ！！  
それにアルデイスからここいらで襲われたと聞いていなければ  
直撃をもらっていったわ！」

ん・・・？

いつかのお姉さまの知り合い、ですかね 耳長いですし、エルフの  
ようです

これまた美人ですね その遺伝子、人間にもくださってカンジです  
ま、兎にも角にも彼女の知り合いのようなので、説得を試みてみます

「・・・彼女の知り合いですか？

私、空雷時 黎と名乗るものですが、あなたは」

「貴様が死ぬのなら名乗ってやる」

「盛大にお断りします」

私が即答すると、いかにも『チッ』みたいな顔になった後

「我の名はマンノールだ

ネフテス国のアルデイスの統べる村の幹部を務めている

今日はロバ・アル・カリイエとの交易が我の番でな

夜、こうして寝る時間を潰して箒に乗っておるのじゃ」

ほう？ 東方とですか・・・

時速950kmといえは軽く旅客機並みのスピードですから  
たしかに1日潰せば交易可能ですね

「ほう、ロバ・アル・カリイエと、ですか・・・  
その袋に交易の品が？」

箒には大きめの袋が結び付けられていました

「うむ 今日已向こうでしか取れぬ薬を貰ってきた  
それから魚介とかじゃな

向こうにしかおらん魚など、うまいぞ  
酒と良く会うのだ」

と、マンノールさんが妄想界にお出かけしてしまいました

それにしても、エルフの人って乗りやすいですね

なぜあんなことをした相手と話せるのか、気が知れません（↑

ま、ガンダールヴだと知れたら大変な事になるでしょうがね

「そうですか・・・お忙しいところ  
引き止めて申し訳ございませんでした」

「いや、よい

それから、私やアルデイスは気性があまり激しくないほうだから  
いいが

他の者だと、殺されるかもわからんぞ あまり襲うでない」

「わかりました、以後気をつけましょう」

殺されるかもしれない・・・ですか

ま、確かにエルフ相手に本気で戦えといわれても  
自分魔力の底が分からない時点で色々終わっていますし  
そもそも先住魔法って・・・勝てる気がしません

さっきの光の矢も“箒”という媒体を使っていたから受けられまし  
たが

杖の無い先住魔法なんて、どう受ければいいんですか

魔探知出し続けて、読めるかどうか・・・といった所です

というか2日寝ていない時点でなかなか極限なのでもう戦いとか  
言っている場合じゃないんですよ、実は

早く寝たいです 人と話して気がつきました  
思考能力がほぼ残っていません

今考えれば、何の迷いも無くかめはめ波ぶつ放した時点で少しおか  
しかった気がします

「それでは・・・2日ほど寝ていないので失礼します  
アルデイスによろしく」

「お、おう」

早く寝ましょう・・・

と、一先ず寮に来たのはいいですが・・・

どこで寝ましようか・・・ね

まさか変体サイトのようにルイズのベッドに潜り込むのは色々アウトですし

他の方、といっても知り合いがミス・ロッタとミス・キュルケにミス・タバサの3人

しかいませんし・・・しかもそんなに親交はありません

嗚呼・・・無理です、そろそろ限界が近いです

このまま廊下で・・・いや、無いですね

それもコレも、二股をしたギーシュが悪いのです

部屋に押しかけてやるのも一興ですが、場所が分からない上にそんな暇は、無いですね

あ・・・そうだ、使い魔の小屋があるじゃあないですか

藁もあることですし、寝れる気がします

☆★@★★☆

つきました 見知った使い魔も何匹かいますね

とりあえず適当なスペースを見つけて、横になります

「ふう・・・」

横になった瞬間、とてつもない眠気が来ます

横にはミス・キュルケの使い魔の爬虫類がいますが、気にしません

火がついていて暖かいので、もうこのままでもいいです

さすが3大欲求の頂点に立つ欲求 生物の好き嫌いなんて超越します

おやすみ・・・・・・・・

side シエスタ

今日も1日はじまりました

昨晚厨房にレイさんが来て、トウフ という物の下準備をされていききました

野菜クズでつくった料理がおいしいのですから、きっとそれもおいしいに違いありません

マメで作ったチーズ、という不思議な食べ物 是非食べてみたいです

と、気がついたら使い魔の宿舎の前に到着していました

今日の私の役目は、使い魔たちを起こして、エサを与えることです

一見楽そうに見えますが、実はそうでもありません

契約によって頭が良くなっているので、滅多に無いのですが

稀に・・・極々稀に

竜に襲われたり

火を噴かれたり

悪い場合には、その、性的なアレで襲われたりもするので  
結構危険な役目でもあるのです・・・

覚悟を決めて・・・

ベルを構えます

ドアノブを握ります

一気に・・・入る！

『チリンチリン！』

ベルを鳴らして、種類別のエサを置いと、「お、朝ですか・・・」

・・・え？

「レ・・・レイさん？」

私が言うのと、レイさんが伸びをした後答えました

「おはようございます、シエスタ やっぱり寝るとスッキリしますね  
・・・色々と」

「え・・・あ、ハイ」

寝ていなかったのでしょうか？

そういえば、曾お爺ちゃんもタルブにきてから  
しばらくは寝ていなかった、と聞きました・・・  
やっぱり良く分からない土地に来て不安なのですね

そんなレイさんの気持ちも分からず、食い意地ばかり張っていた自  
分が情けないです

それに、確かに使い魔ではありますが、こんな動物達と同じ部屋で  
寝かせられるなんて

ああ、可愛そうなレイさん・・・！

「ところでシエスタ 少しいいですか？」

「・・・？ はい、どうぞ」

なんででしょうか？

レイさんが、かなり真剣な顔をしています

「実は、質問したいことがあるのです――」

ゴクリ、シエスタは生唾を飲む

「シエスタの、私の第一印象は、こういったものですか？」

・・・へ？

瞬間、空気が緩んだ

体から、力が抜けてゆく感じがする

「ええっと・・・優しそうな人だな〜とか」

実はカッコイイ人だな、とも思ったが、口にしないシエスタであった



少し遡ってside 黎

「知らない天井・・・いえ、知らない世界ですね」

黎は、気がつくときよく分からないところに寝ていた

「さっき、小屋で寝たと思ったのですが・・・」

下は全面、綿のようで、それでいて毛皮のようで  
羽毛のようなフカフカした地面が広がっている

立ち上がってみれば、地平線の果てまで見渡すことが出来た

美しい森や、滝から続く泉に、中世ヨーロッパを髣髴とさせる美しい建造物

空を、形容しがたいほど美しい鳥が舞い

七色の美しい花が咲く

そう、此処はまるで・・・

「天国・・・？」

そう、天国のようであった

だが、なぜ天国にいるのか、黎には意味が分からなかった

「(夢?・・・いや、それにしてもあまりにも鮮明だ  
だとすれば・・・死んだ、のでしょうか?

過労死は、本当に眠るように死ぬといいますが、それほど働いた覚えはありません

もしや、魔力とやらを使い果たして――?

いや、それとも実はとくに死んでいて転生は  
死後の世界で見ていた夢物語に過ぎぬ・・・と?)」

と、まあ黎がいろいろ思案を重ねていたのだが  
それを打ち砕くように背後から”あの”声が聞こえた

「・・・やーっと寝てくれましたね?  
転生者さん?」

「・・・そういうアンタは、堕ちちゃった神様か」

「誰が堕ちちゃった神ですかー!!?」

と、そこにはついとうっかり黎を殺してしまった女神がいた  
怒り心頭な様子で。

「本当のことだろうが馬鹿

それが嫌なら発酵を促進する能力でもよこせ」

「ぐぬぬ・・・!

そんなもの、向こうの土メイジにでも頼んでください!」

あ、その手があったか、という顔になった黎は  
少し上機嫌になって次に一番聞きたかった質問をした

「で・・・何故、私はこんな見るからに天国なところにきているの  
で？」

「いい質問ですね

つまり、アレです あなたに色々説明しなければならないことが  
ありまして

寝るのを待って、呼び寄せたんです」

「説明・・・ですか？」

「はい・・・って、あなた、さっきと随分口調が違いますね」

女神が言うと、黎はいい笑顔で答える

「醤油作りの手立てが見えましたから・・・と、それよりどういっ  
た内容で？」

「納得いきませんが・・・つまり

あなたの見た目とか色々いじりました、ということです」

ま、薄々気づいていたみたいですけどねー  
と言っ  
て女神はどこ  
からか

大きな鏡を取り出して、黎をそれに映した

「・・・これは」

どう見てもステイルⅡマグヌスです 本当に有難うございました

「・・・ちょっと待て

まんまステイルじゃねーか

しかも、コレお前、あのバーコードみたいなのもあるしてか、それ以前に、どう見ても平民に見え無いんでせうが？

何故貴族の方々は即効平民と判断したの？」

黎が言い終わると、女神は得意げに笑いながら

「ふふん、服装がソレだから仕方の無いことです

それから、ステイルなのは私の好みです

せっかく皆アニメ顔なのだし、やってみたかったんです

ちなみにサイトの頭をいじってあなたを日本人に感じるようにしておきました

抜かりない私、ステキ！」

「(ダメだコイツ、早く何とかしないと)」

ああ、それから、と女神は付け加える

「あなたを他の人が見たとき、だいたい好印象を持つようになっていきます

エルフの方々が、いい人ばっかに見えたでしょう？

それはその能力が働いているのです

ま、第一印象なので次からは効果はありませんがね」

「へえ・・・それじゃ、ついでにいくつか頼みがあるのですが」

「なんででしょう？ 無理があるものでなければ聞いてあげますよ？」

なんてったって全知全能の神なのですから

と、さっきとは打って変わってフリーダムになった女神を見て少し

不安になった黎だが

とりあえず気にせずに、家を建ててくれるよう頼んだ

「家については・・・まあ、私の考えでも読んで家具とかその他もろもろも用意してくれると助かります」

「ふむふむ、了解しましたー  
にしても、結構図々しいですね」

「まあまあ　それで、場所は？」

「うーん、地上だと色々無理があるので、空です  
黎さんが魔探知、でしたっけ？　それを使えばわかる位置にあります  
ます

魔法学院の遥か上　高度1万メートルくらいにありますよ」

「高いよ！　それ殆ど宇宙じゃねーか  
てか魔探知そんな届くかわからねーよ！」

「大丈夫です！　普段は神のご加護で浮いていますが  
あなたが屋敷に行って操作すれば自由に動けますから！」

「なにが大丈夫なのか分からんが・・・ま、いいか」

この時、黎は、一直線に上に行けばよいと思っていた

だが、持ち前の方向音痴を発動して、最終的に魔探知を限界突破して  
使うことになってしまったのは、そう遠くない未来であったりする

☆★@★★☆

『チリンチリン!』

ベルの音が聞こえた

太陽が昇った直後のようで、恐らく今のが起床の合図といったところだろう

と、音のほうを見ると、シエスタがかなり慌しく動いている

「お・・・朝ですか」

此方に気がついていないようなので、多少芝居がからせて眩く

「レ・・・レイさん!？」

く以下略く

クッ・・・まさかあそこまでポカーンとされるとは

こっちだって恥ずかしかったんですよ!!

ですが、やはり皆好印象は持つようですね

だってこの赤紙神父を見て優しそうなんて思いませんもの

いや、原作知識のせいかもしれませんが

「そうですか・・・いや、なんとなく気になりましたね

失礼しました　ちなみに、ここで寝ていたのは私の気まぐれなので  
要らぬ心配はしなくてもいいですよ　それでは」

黎は一方的に話を打ち切ると、外に出て空に駆け上る

「(家・・・どんな仕上がりですかね？」

まだ早いし、はやくベッドで二度寝したいです

現代版キッチンがあれば、豆腐作りもたやすいですしね・・・  
しかし」

---

高度1万メートル

それはかなりの高さである

普通に走ったところで、辿り着くにはかなりの時間がかかる

だが、この男　ステイルⅡマグヌス・・・空雷時黎は、普通ではない

空に魔力の壁を作り出し、ソレを思い切り踏みつけ  
高く高く飛び上がるコレを何度も繰り返す

そして、そのうち・・・

「・・・あーあ」

迷うのであった

続く

おまけ

黎

「レイさんの、キッチン講座  
豆腐編!!」

作

「なんだこれは」

黎

「ん？」

黎さんのキッチン講座と言っているだろう

ま、分かりやすく言えば話の中で俺が作る料理の作り方をここで  
言うぜってカンジだ」

作

「なんで？」

黎

「おまえさ・・・SSの中で豆腐の作り方語られたいわけ？」



作

「いや・・・でも俺としては  
サイトが豆腐作りに怪我也治らぬまま借り出されて  
いろいろやらかs」 黎

「ネタバレ禁止イ!!」

作

「でもさ・・・一応作る工程は作中で書きたいぞ?」

黎

「しゃーねえな・・・少しだけな  
じゃ、始まるぜえええええええええ!!」

作

「テンション高い!?!」

?大豆を一晚、約2倍の体積の水に浸けるよー ちなみに洗ってか  
らね

?ガーゼをボウルにセッティングするお

?大豆と水を1体1くらいの比にしてミキサーで潰すよ  
しっかり、しっかり、しっかり潰す  
ここで手を抜くと＼(＾o＾)／になる

?3を大きな鍋に入れて、それと同程度の水をぶち込む  
んでもって、よく混ぜながら10分加熱するよ  
火が通ると一瞬で溢れてくるから 注意 クソ注意

?2に4を流し込んで、搾るよー搾るよー

残ったカスを”おから”と言うよ

熱いから注意！

おからおいしいよ、おから

？豆乳をかき混ぜながら弱火にかけるよ

75〜80度くらいになったら火からおろして、ニガリをゆつくり全体にかけるよー

ニガリが均一に混ざるように、ゆつくりと豆乳を移動させるように混ぜる

ここでグリグリと混ぜすぎると、＼（＾Ｏ＾）／になるよー

全体的に沈殿して、上澄みができるようであれば

ニガリをかけるのをやめて15分待つよ

？ここに水分を逃がせるように、穴が合った型に濾過用のガーゼをぬらして

セットして隙間ができないようにぴっちり貼りつけるよ

で、この上からさっきの沈殿物をかける

？ここに200グラムくらいの錘をのせて、15分くらい放置するよ

？水をはった容器に1時間くらい浮かべて

余分なニガリを取り除けば豆腐のできあがり！！

黎

「どうだ、簡単だろ？」

作

「すごい・・・面倒くさいです（書くのが）」

黎

「ちなみに作者は、実際に作った後すぐに食ったんだが  
暖かい豆腐が口に合わなかったので、冷やして冷奴で食ったそう  
だ」

作

「あったかい豆腐とか、あったかい大根おろしとかはキライだ」

黎

「あったかい大根おろし・・・それ、カブじゃね？」

作

「いや、そういう懷石料理とちがって！

ご飯に出汁醤油とかと混ぜてかけたりする奴あるだろ？

アレ、ダメなんだよなあ・・・」

黎

「んなこといったらサンマとかにかけてもダメだろう？」

作

「バーカ、あったかくなならないように冷蔵庫でしっかり冷やすんだ  
よ、JK」

黎

「ま、下らん話はこの辺にして・・・

それでは皆さんまた次回！ いよいよデルフが来る・・・かな？」

作

「皆、大根好きー？」

続く  
・  
・  
・  
かも

**第7P 一軒屋ほしってカンジ? (後書き)**

今回もカオスだった・・・orz

それから、試験の時期なので、しばらく更新できません

申し訳ございませんッ!!!

**第8P** 家かと思ったら国でした、何を言っているかわからねーと思うが俺にも

んんん（・▽・） さん、ご感想有りがとうございます！

黎「トーフおいしいよ、トーフ」

作「あったかいのは論外な」

黎「まだ言うか！ イノケンティウス 魔女狩りの王！」

作「なんでー！？」

**第8P 家かと思ったら国でした、何を言っているかわからねーと思うが俺にも**

「はぁ・・・はぁ」

どうも、空雷時黎で・・・す

絶賛死にかけ・・・です

「寒い・・・空気が薄い・・・遠い」

彼は迷っていた

☆★@★★☆

「ほええ・・・」

そのころ、一方的に会話を打ち切られたシエスタは途方にくれていた

それはそうだろう

超能力者、とだけ説明はされていたが 誰が空に人間が駆けていく  
と思うだろうか

だが、いつまでもこうしている場合ではない

詳細は話されなかったが、決闘でサイトが大怪我をした、と聞く

今日はその見舞いにも行くつもりだ

「よっ」

と、そんなことを考えていると、ふと見知った声が聞こえた

「サイトさん！」

お怪我はもう良いのですか？」

シエスタの問いにサイトは、右腕をクルクル回しながら平気、平気と答えた

「にしても・・・秘薬って凄えな！」

骨折だって、こんなすぐ治るんだから！」

「ええ、水の秘薬は本来平民に手が出るような品物ではありませんし  
ミス・ヴァリエールにお礼を言ったらどうです？」

と、シエスタにしてみれば、真相を知らないのでごく当然のことを  
言っただけなのだが

”その”ミス・ヴァリエールに殺されかけたサイトとしては面白くない

「アイツにお礼なんか、絶対言わねーよ」

そりゃそうだろう

サイトにしてみれば、無理やり此方に呼び出されて  
さっそく左手に謎の紋章を刻まれた上に、待遇は家畜並

その上他人の決闘を押し付けられたのだ



平民だ貴族だとあらかじめ差別をするやつらに腹を立てて  
すこし調子に乗って決闘を受けたら、この様である

もうこれはどっかのツンツン頭よろしく『不幸だー!!!』  
とか言って発狂していいレベルである

ま、その扱いに不満を持って神に家を立てさせた輩もいるわけだが

「え・・・でも」

「でも何も無い！

・・・って、腹減ったなー

あの後ずっと寝てて、なんも食って無いんだ」

そう、この早朝にフラフラしていたのも、そのためだった

「えっと、じゃあ厨房まで来てください！」

「おう！ 悪いな！」

☆★@★★☆

「ん？ これ、大豆？」

と、厨房まで来たサイトは、ふと容器に水とマメが入ったものを見  
つけた

「あ、そうですよ

昨晚、レイさんが来て”トウフ”なるものの下準備をされていか

れたのです」

「豆腐！　へー　べつに好きでも無いけど、食べてみたいな  
ああ、熱い味噌汁が飲みたい・・・」

に、しても以外だ

あの赤毛長身ないかにも”ワカモノダゼー”みたいな匂い漂うあい  
つが

豆腐の作り方を知っていると

ひょっとしたら、テリヤキの作り方も知っているんじゃない・・・

「テリヤキさえあれば・・・」

「？」

この世界で生きる希望を見つけたサイトだった

☆★@★★☆

「・・・ッ」

『死』

黎の頭の中にはこの言葉が浮かんでいた

振り払う

また、浮かぶ

振り払う

まだ、浮かぶ

「く・・・っそ」

呼吸が出来ない

体温の維持も不可能

場所確認のための魔探知で、魔力もほぼ底をついた

今なら、エネルギー波一発撃てば落ちることが目に見える

今まで分からなかった、『底』が見えるのだ

「（ここで・・・死ぬのか）」

馬鹿らしい

あまりにも馬鹿らしすぎる

たしかに、自分の方向音痴はひどいものだった

幼少のころより、遠足に行けばはぐれる

親とどこかに行ってもはぐれる

映画に行っても

レジャーに行っても、迷う

6歳になるまで、『右がこっちで左があっち』というのさえ理解していなかった

だが、それで死ぬとは思わなかった

方向音痴も、記憶力のついてきた14を境に治ってきていたのだが、なぜかこっちに来てぶり返してきた

「(初めての土地、だからですかね・・・?)」

この男、初めての土地では必ず1回は迷うのだ  
もう、それは病気の域だった

「死んで・・・たまるかアアアアア!!!!!!」

雄たけびを上げる

自らを奮い立たせるために

そして黎は足を進める　生きるために・・・光を、目指して

『なんですか、この無駄シリアス』

と、突如全方位から女神の言葉が聞こえた

幻聴かと思ったが、今はすぎる他無い

「手前、いいから、助ける」

『そんな言い方じゃ嫌でーす☆』

「ざけんな調子乗りやがってクソ女郎め  
ぶち殺すぞ、ああ？（お願いします助けてください）」

『思考と言語が逆転してますよー

・・・ま、死なれても困りますし、いいでしょう」

女神は、それだけいうと、一息おいて謎の言葉を発し始めた

『 ” ★ ● ▲ × 7 8 9 t X 7 8 9 7 8 ★ × × q a w s e d r f g j  
y u 8 u y u 1 5 6 3 ” ・ ・ ・ 演算完了！  
ワープします！ 』

フッ

女神の言葉が聞こえたと同時に、視界が一面光に包まれた

視界が開けると、空を飛んでいた

「!?!」

咄嗟に空中で浮遊する

回りを確認すると巨大な洋風の城や、屋敷

和式の城や屋敷さらには現代風のビル郡

さらには畑にビニールハウスや、森に川、海まで見える

「（なにこのカオス）」

『誰かさんの希望がいろいろあったので、全部おいてみましたー

ま、軽くドイツくらいのは広さがありますよ

その他の説明はあなたの胸ポケットにしのばせました

ついでに疲労も回復させておきましたよー

うーん、私優しいー★

そこに痺れて、懂れてー★』

「だめだコイツ、早く何とかしないと」

続く

**第8P 家かと思ったら国でした、何を言っているかわからねーと思うが俺にも**

黎「おい、試験勉強どうした」

作「・・・キラ★」

黎「だめだコイツ、早く何とかしないと」

**第9P 命のキケンってカンジ? (前書き)**

黎..禁書ネタ多いね?

作..だいたい女神が悪い

神..えー・・・



## 第9P 命のキケンってカンジ？

「これはツ・・・・・・・・！！！」

黎は感極まっていた

ソレというのも、神の悪ふざけにより、一軒屋を所望したのにドイツくらいある

ラ●ユタ・・・もとい白の国みたいなものの中の、現代風の家にちよつくら

お邪魔したのが始まりであった

～回想～

「ここは・・・ダイニングキッチンか」

黎は、人の家にお邪魔したら、トイレとキッチンを覗くという癖がある

黎に言わせれば、「キッチンとトイレ、それからゴミの出し方でどんな人間かが分かる」

のだそうだ　ちなみに黎の家のキッチンやトイレは、とても綺麗にしてある

「ん・・・冷蔵庫の中も整理されているな」

と、満足げに頷き、その場を去ろうとした……が

「……え？」

おかしい 色々おかしい

まず、何故冷蔵庫のような電化製品があるのか、そして電気が何故供給されているのか

さらに中身はどこから来たのだとか、実はこの家誰か住んでるんじゃない？

あれ、不法侵入？ みたいな考えが一通り浮かんた後、黎は神を呼びつけた

「で、どういうこと？」

「……たびたび呼ぶのをやめてください  
いくら最上級神といえど、他空間にかかわるのは尋常じゃなく疲れるんです」

「知らないよ いいから、どういふことか教えてくれる？」

「私のちょっとした遊びごと……親切です  
ちなみに、食べ物や管理や、街中の自販機の交換とか、そういうのは

ロボットがやってますよ 学園都市（改）みたいな感じですが  
会いませんでしたか？」

「・・・全然」

てかどんだけ禁書好きなんだこの姉さんは

「私は、どっちかといえば科学サイドが好きです」

「聞いてないよ てか、読者層違うから！

・・・ま、いいや

で、もしかしたらもしかして、醤油とか味噌もあったりするの？」

黎の問いかけに、もちろん！と女神は胸を張って答える

「さらに言えば、新鮮なタマゴとか そーいうのもありますよ

基本、あなたの世界のものは何でもそろってはずです

パソコンとか携帯も、この島の中だけです、通信体勢は整っている  
ので、使えますよ

それに、病院とかにはレントゲンやらなにやらもありますから治療  
に使えると思います

・・・つと、こんなものですかね？」

「ふうーん・・・ま、お礼は言っておくよ」

「ちょ！

何ですかその態度！ 不敬です！」

女神が怒り出したが、早く料理がしたくて仕方が無い黎は

ソレを華麗にスルーしてキッチンへ向かった

「おい、無視は無いんじゃないですかー？」

なんかブツブツ聞こえるが、無視しよう　そうしよう

く回想終わりく

つまり、黎は醤油と適当な野菜で煮物を作ったのだった

「う・ま・い・ぞオオオオアアア！」

料理の知識やコツなどを詰め込まれた黎の料理の腕は今やかなりのものになっていた

「ああ、たった3日、されど3日！

日本の味だがや！」

「何故名古屋弁？」

ほっとけ、と女神の突っ込みを流して煮物を口にかきこむ

「ふう・・・」

一息つき、先ほど入れておいた緑茶をすする

「で、さあ」

すると突如、黎が女神に声をかけた



あーんな人間ごときに名前を呼ばれて崇め奉られて

ソレが原因で戦争を起こさせるような

神なんて神じゃありません！

まだ”ダイダラボッチ”や”ぬらりひょん”、”河童”のほうがマシです！

そもそも名前の概念は個人識別のためにあるわけですねえ！

唯一無二の存在である神に名前なんて要らないんですよオオオオオオ！！！！！」

ぜい、ぜいと女神は息を荒くしながら言い切った

「あー・・・わかったから、落ち着け」

多少引きつつ落ち着かせる

「（じゃ、俺が考えてみるか、名前）」

うーん、と2秒ほど思案した後、確認を取る

「ジュブナイルテラー空想生産、どうだ？」

「・・・それは私がここを作ったから〜とか言うんじゃないでしょうね？」

ぶっちゃけその通りなので、気にせず続ける

「ジュブナイルテラーかっこよくない？ 空想生産

なんでも作れるんだぜ？・・・神だから当然といえそうですが」

だが、黎のその考えとは少し違ったように空想生産はすこし憤慨したような顔をして答えた

「当然って・・・言っておきますがね、私が自分だけで空間を操れるのは

かなり上級の神だからです・・・いわゆるLv5ってやつです  
一般の神は、パソコンとか携帯電話で操ります」

「なんで!？」

「本来、空間をいじくるのには異常な計算量がいるんです

世界の法則を乱して、無理やり物を出すんですよ?

次元物質<sup>データマター</sup>みたいポンポンよく分からないものを作り出せると

思わないでください ま、Lvで例えれば、空間をいじれないのが、Lv1

パソコン等、他の頭脳と媒体を必要とするのがLv2

魔法の杖みたいな、媒体を必要とするのがLv3

自分の頭だけで空間をいじれるのが、Lv4

そして、生物さえも出現させることができるのが、Lv5です」

「へ・・・って、じゃあ錬金は?

結構捻じ曲がってると思うけど」

黎の問いに、空想生産は少し困ったような、呆れたような表情になって答えた

「それはですね、サイトさんいるでしょう?

使い魔召喚の儀で、異世界から呼ばれた」

実は彼も、平行世界の住人なんです　と一息おいて続ける

「つまり、この時空・・・ゼロ魔の存在する世界は

主にサモンサーヴァントのせいで時空が歪んでいるんです

だから、錬金とかいうチートもまかり通るわけです

固定化もまた、しかり

で、時空が歪んでいるから比較的楽に介入できるので

この島も作成できたんです」

「へえ・・・ま、どーでもいいんですけど」

「いい加減、殴っていいですか？」

と、女神は頭に青筋を浮かべながら拳を握る

黎だって神に殴りかかれて勝てる気はしないので、穏便に謝るところにした

「あー、その、スンマセンした」

「やる気無ッ!？」

じゃーどうすればいいんだよ、とばかりにジト目を空想生産に向ける黎

「つかさ、いいかげんグダグダやってないでデルフとか買いに行かないと

読者さんも飽きると思うんだよ　いろいろイベント仕込もうと思  
って虚無の日まで

『一週間後』とかやらずに書くことにしたはいいけど、特に



浮かばないしよう」

「メタ発言自重!!」

豆腐とか作ればいいでしょ!？」

「作らなくてもここにあるもん」

うっ・・・と押し黙る空想生産 神の威厳はどこへやら

「つーわけで、まず地上に帰ってサイトくんと親交を深めてきます  
あと、改めて色々有難う!」

「（お礼言われた!）はい、では第2の人生、謳歌してくださいね  
!!」

黎は、後ろ手に手を振り家から出ると足に魔力を纏わせ  
大きく飛び上がり、島から飛び出た

「（島を出たし、口調を戻しますか・・・

って、そういえば、島の名前を決めていませんでしたね  
せっかいですし、かっこいい名前を————って!）」

黎は忘れていた

此処が高度1万メートルであることを

「あー・・・うん

不幸だアアアア・・・」

その日、学院からは綺麗な流れ星が見えたそう

side サイト

「そういや、黎どこ行った？」

サイトは、あのあとご飯をゴチになり、朝食を配ったりしてお手伝いをしていたのだが

ふと自分と共に呼ばれた青年のことを思い出す

なにかと親切なのが特徴的だったが、たまに毒舌を吐いている青年  
身長が自分より頭1つは高い高身長の彼は、決闘のとき、恐らく青  
銅と思われる

人形を素手で碎いていた 常人にはまず無理だろう

となると、空手でもやっていたのだろうか？

背も高いし、アイツとケンカは絶対したくねーな、とそこまで考え  
ると

独り言に返答があった

「あ！

そうです、黎さん！！

空に！

こう、ババババ／＼ッって！」

「すまん、わけわからん」

（説明中だお（＾ω＾）Ⅱつ「茶」）

「空に・・・上っていった！？」

なんだ、それは！？

「はい、黎さんいわく、超能力だそうです」

## 超能力

それは本来人間には無い能力で、遠くのを動かしたり、スプーンを曲げたりするものだ

少なくともサイトの辞書の中に、超能力で空を駆け上る人間は無い

「(何者・・・なんだ?)」

「ま、いっか!」

「?」

しかし、サイトは馬鹿だった

「(考えてどうなるわけでもねーし、なにより同じ日本人・・・だよな?)」

確認取って無いけど・・・)」

改めて考えれば、サイトと黎はそれほど深く互いのことを知っているわけでは無い

・・・黎は一方的に知っているが

「あ・・・サイト」

すると、ルイズがサイトを発見して声をかける

サイトとお喋りしていたのが気に入らないのか、シエスタを一睨みすると

サイトに向けて目を伏せて言った

「えっと・・・悪かったわね、色々」

「・・・へ？」

「ああ！ もう！

いいから来なさい！ ご飯あげるから！」

「あ・・・でも俺、腹いっぱいだし、アイツもいねーし・・・」

「いいから！！ 来るの！」

ガルルルル、とさっきとは打って変わって今にも襲い掛かりそうな勢いで

サイトの手を引くルイズ

と、その瞬間大きな爆発音が響いた

「な、何！？」

ルイズが声を上げる もちろんルイズだけでなく、周りの貴族や使用人まで大騒ぎだ

「何、今の音!？」

「爆発!？」

「まさか、盗賊が攻めてきたとか？」

「そんな馬鹿な・・・」

☆★@★★☆

所変わって 学院長室

「・・・今の音はなんだと思うかね？」

ミス・ロングビルよ」

学院長室には、今 オールド・オスマンと、ミス・ロングビルの2人がいた

オスマンは、今の音の正体を思案しつつ、右手でヒゲを撫で

空いた左手でミス・ロングビルの尻を撫でていた

「分かりませんが、どさくさに紛れてお尻を触るのはやめてください」

「つれないのー、そんなんだから婚期を逃すのじゃ」

と、気にしていたらしくミス・ロングビルは顔を真っ赤にしてオスマンをしばき始めた

「あいてて・・・もっと老人を大切にせんかい！」

「いい加減にしないと、マジで王室に訴えますよ！」

ボタン！！

ロングビルが怒鳴ると、その瞬間にドアを開ける音が響いた

そこには、頭が寂しいことになっている男が立っていた

「オールド・オスマン！！

大変です！！！！」

「なんじゃね、騒々しい

コルベール君、君はそんなだから禿げ上がるんじゃ」

「頭の話は関係無いでしょうがアアアアアア！！  
って、今はそれどころではありません！」

「なんじゃね、大の大人がアタフタとみっともない」

オスマンは『ハア』と大げさにため息をつくと、話すように促した

「実は――」

☆★@★★☆

時をさかのぼって

side 黎

「不幸だアアアア!!!」

絶賛落下中ううううううう!!

あ、俺立てたわ

ボキィツツ

「ガッ!!?」

ヒュッ

説明しよう!

黎は、空中で立てたことを思い出し、立ったのだが

準備不足とかなんとかで高さゆえに足を折ってしまったのだ!

そして、落下してしまったのである!

「……………(気絶)」

続く



〽今回の蛇足〽

ダイダラボッチ〽天地創造の神の生き残りといわれる

心優しく、巨大　今でもビル郡などに紛れて人間  
を見守っているという

ノリを食って笑ったらいいノリができた印

ぬらりひょん〽信仰されなくなった家神（神棚とかの神様）が

落ちぶれて妖怪化したもの

人の内に勝手に入って主人のように振舞う

別に妖怪の総大将ではない

河童〽ぬらりひょんと同じような境遇

信仰されなくなった水神（泉の神とかそなん）が信仰され  
なくなって

落ちぶれ、妖怪化したもの

テラ強す

〽こっから下は禁書〽

未元物質〽学園都市レベル5第2位

「俺の未元物質に、常識は通用しねえ」

ググレ

## 第9P 命のキケンってカンジ？（後書き）

作..電波を受信した

黎..？

作..『とあるレベル5の空想生産（仮）』

みたいな・・・空想生産が禁書世界行ってヤッハー、みたいな

空想..なにそれ素晴らしい

**第10P 城に出入り禁止になった ちくしょう・・・ちくしょおおお（ry**

更新が遅れて、申し訳ありませんでした

くっ、ちゃんと書けているか、わからん

黎「死になさい」

作「ヤダ！」

**第10P 城に出入り禁止になった ちくしょう・・・ちくしょおおお（ry**

ハア、大げさにため息をつくオールド・オスマン

「で・・・何かね？ また下らない事だったら君の来月の給与が楽しいことになるぞ？」

「脅し!？」

い、いやそれより大変なんです！ コレを見てください！」

と、差し出したのは1枚の手紙だ

「・・・で、これがどうかしたのかね？」

「よく聞いてください、オールドオスマン・・・」

と、コルベールのあまりの気迫に多少引きつつ、構える

「コレは・・・」

「うむ・・・」

ごくり

つばを飲み込む音がした

「土くれのフーケからの予告状です」

第10P

『城に出入り禁止になった　ちくしょう・・・ちくしょおお（ry　ってカンジ?』

「（痛い・・・体中がバラバラになりそうなんだけど・・・）」

黎は、落ちた

もう、普通に落ちた

残り100メートルくらいになったところで

すぐ籠められる魔力をすべてこめた衝撃波を下に放ち  
衝撃を弱めたのだが、焼け石に水だった

「（でも、アレ無かったらきっと死んでいたな・・・）」

と、学園の庭(?)に空いた巨大なクレーターに身をうずめながら、彼の意識は闇に消えた。

「なんなのよ・・・これ」

ルイズは、こめかみをピクピクさせながら、誰ともなしに呟いた

先ほどの爆発音を聞きつけ、皆一様に外に飛び出た。

元々娯楽の少ないこの世界、くだらないドットメイジの決闘にもあれほどの人があつまるのだから、当然といえばそうだろう。

もちろん、ルイズやサイトも見に来たのだ・・・が

そこには、巨大な穴の中心で横たわる人間の姿使い魔があった

★☆☆☆@☆☆☆☆

Side 黎

「で・・・説明してもらえるわよね？」

「はい・・・なんと行ってよいやら」

状況説明をしよう

サイトが、俺を寮にお持ち帰り

で、秘薬で俺の意識を無理やりもどした

ということですよ 適當？

気絶してたんだし、仕方の無いことです

さて・・・

それはともかく、この状況どうしましょうか？

まあ、もつとも このルイズさんの怒り様では、無罪放免とはいかなさそうですがね

ですが・・・！！

もうしばらくすれば、フーケイイベントがある

と思われますし

主人とあまり離れた関係にあるのもいただけません。

どうにかならないのか………

と、私が汗をダラダラ流しながら考えていると、サイトの助け舟が入りました

「そういや、空に走っていったって、シエスタが言ってたけど……」

「は？ 何よ、それ」

と、そんなことは初耳なルイズが サイトに突っ込みます

……よくやってくれましたサイト！！！！

「実は……こちらに来て、しばらく使えなかったのですが  
私は所謂“超能力”を操ることができました。

決闘でも、魔法のようなもの、使っていたでしょう？ それです  
それが、先日の決闘で使えるようになったので、ためしに空へと  
昇ってみたのですが……  
やはり本調子ではなかったようで、お恥ずかしながら落下してしましました」

「じゃあ、あのクレーターは何？」

「………あれはですね、上空で姿勢を保ち損なって気絶してしましまして

実は気絶していて雲の中に入ったときとてつもない寒さで死に掛けたときに目が覚めたのですが、もうすでに姿勢を直すどころか言える高さでなく

落下時の衝撃を少なくしようと、下に向けて衝撃波の類のものを放ったので

あぁなってしまいました」

魔力のコーティング、薄くなってたんですね？

雲が寒くて、1万メートル行けるかい！

・・・と、私が言うと、ルイズは案の定

「何よ、それ！！ アンタはまた勝手なことして！  
だいたいあの穴、どうするのよ！！ それに、大怪我までして・・・！！」

怒りました・・・ですが、私の怪我について触れていますね

心配してくださっているのでしょうか？

「ということでアンタは、私が許すまで雲より高く飛んではダメ。  
わかった？」

「・・・・・・・・はい」

しま った ！！

これでは・・・城にいけない！



味噌や醤油も水の泡、ですか・・・ハハッ

笑えよ・・・と、落ち込んでばかりいられません

タルブには醤油があるじゃありませんか・・・それに

少量とはいええ、大豆もあります

あれをいただいて、増やせばいいのですよ!!

と、盛大に現実から逃げていた私ですが ルイズの悲壮な声によって引き戻されます

「うう、生活費が・・・ どうしてくれるのよ！  
秘薬ばかり使わせて！」

「それは本当にすいませんでした」

ですが、まあフーケが予定通り来てくれれば、騎士の称号を貰って、保証金？

みたいなものが入るらしいですし、学生を向かわせたってことをネタにゆすれば

金くらいいくらでも出るでしょう。

★☆☆@☆☆★

そのころ、学院長室では、爆発があったことも気にせず、予告状について議論していた

「いままで、フーケが予告状を出したことはあったかね？  
どうせイタズラじゃろうて」

「で・・・ですが、ここにしっかり『破壊の杖』と書かれています！  
これは、一部のものしか知らないことのはず！  
その様な人物が、こんなことをする意味など！」

「ふむ・・・」

たしかにそうだ、と考えたオスマンは、この後  
まあ皆警備をサボっているし、元気付けるには丁度いい位の考えで  
皆にこの手紙を掲示したのだった

★☆@☆★

さてあの後といえば、ルイズが『サイトも謝れ！』と言ったのですが  
サイトに見れば、ルイズにボコられて、それで秘薬を使ったの  
だから自分は悪くない  
ということ、口論になり・・・

南無・・・。

「サイト、きみはじつにばかだなあ」

と、私と一緒にボロボロな姿で穴を埋めているサイトに呼びかけます

「うるせえ・・・だいたいお前のせいだろ？」

「申し訳ありません・・・っと、それにしても誰も使わないのに、なんで直さなければならぬのでしょうか？」

「いや、壊したんだから、直せよ」

ほう？

サイトは立派な考えを持っているようですね

「それでは、そんな立派なサイトさんに、すべてを任せて私は「待て」・・・冗談ですよ」

「ったく・・・冗談じゃねーよ」

と、サイトがブツブツ言ってますが・・・まあ、当然ですかね？

あきらかに私のとばっちりを受けた形ですし

「仕方ないですね・・・貴方は休んでいなさい  
私がやります」

ご機嫌取りも、しておいたほうがいいでしょう

さっきも言いましたが、フーケや白の国るとき、あまり関係が冷ややかなのも嫌ですし

「おお、マジか！ 悪いな！」

と、サイトは馬鹿なのでゲフンゲフン・・・人がよいので、喜んでくれているようですね

「いえ、むしろ今まで手伝っていただきありがとうございます  
このまま帰るとまたルイズに折檻を受けるでしょうし、厨房にで  
も行っていて下さい

終わったら私も向かいます」

「ああ、ありがとう！」

続く

**第11P    いろいろ危なかったけど、裏工作は多分成功ってカンジ？**

「というわけで、皆    聞いてくれ

・・・えゝ、土くれのフーケから、予告状が届いたのじゃ」

1通の手紙を掲げながら、急遽招集した教員達の前で宣言するオスマン

だが、まったく反応がない

皆一様に啞然として手紙を見ているだけである

「・・・あ、あれ？

皆、どうかしたかの？（さすがに嘘っぽかったかのぉ）」

と、その瞬間    火でもついたかのように皆、騒ぎ出した

「ど、どういふことです!？」

「この学院の宝物庫を狙う・・・!？」

「なんてことだ!」

「今すぐ王室に報告を!!」

「何を馬鹿なことを!

たかがこそ泥ごときに脅えて助けを求めたとあらば、我らの名は

地に落ちようぞ！」

「貴様こそ、土くれを甘く見るな！！」

宝物庫を破られれば、それこそ名が落ちるだけでは済むまいよ！」

ザワザワ・・・ガヤガヤ・・・

「あ、あの・・・皆、落ち着いてじゃな」

予想以上に白熱し、焦ったオスマンがそう言った後、ギトーが杖を掲げた

「フン・・・コソ泥から予告があったとて、なんだと言うのですか  
盗みにきたら、逆に捕まえてしまえばよいだけの話

最強の属性は風・・・そして、私はその最強の属性のスクウェア  
！！

たかが土のトライアングルと言われている土くれごときに負けは  
せん」

と、高らかに言い放った

オスマンは、ここぞとばかりに

「おお・・・頼もしい限りじゃ

そこで、このミスタ・ギトーに宝物庫の警備を担当してもらいた  
いのじゃが・・・

皆、異存は無いかの？」

「なっ」

ギトーが、面食らったような顔をするが、もう手遅れである

「私は、ありませんの

スクウェアである彼なら、フーケにも遅れをとらないでしょうし」

「私もそう思いますわ」

「私ものです」

「うむ」

と、皆 次々ギトーが適任であるといい始めた

こうなると『風は最強なんだい！ 絶対最強なんだい！！』を貫く  
ギトーは、断りにくい

断る、それすなわち 『土』属性に恐れをなしたと見なされかねないからである。

そして、この日 『宝物庫警備最高責任者』となったギトーは、さっそく

「平民なんか役に立つか！」

と言って、衛兵を全員首にしたそうな――

「やれやれ」

その騒ぎを影から見ていた黎は、なんとか警備がついたことに、少しほっとした。

★☆☆☆@☆☆★

「(面倒なことになったねえ・・・)」

ミス・マルチダ・・・もとい“土くれ”のフーケは学院校舎外の・・・具体的には、黎が超能力であけた穴を埋めながら考える

「土くれのフーケから予告状が来た」

最初は、なんの冗談かと思った。

このハゲオヤジ 叩き潰したるかゴラァ くらいには考えていた

だが、あれよあれよとは運び、なんと風のスクウェアメイジが警備についてしまった

「(壁は、物理攻撃でしか壊れず、壊せるかどうかも未定。

警備にはスクウェアメイジ・・・はは、目標移そうかな)」

彼女は、地面に錬金などをかけつつ、穴を埋める

錬金で、こんな時の為に貯蔵してある大きな石を土にして、穴を埋めているのだ

(石はレベテーションで運んできた)

「(それに、背の高い兄ちゃんによくわからない穴埋めは頼まれるし。

なんで断らなかったんだ、アタシは・・・)」

その理由が、彼にかけられた神の加護であるとは、彼女は知る由も



ないのであった

そして

「（鍊金・・・土・・・！！！！  
じゃないのさ！）」                      そうだよ、これを使えばいい

この『穴埋め』が、彼女にあるアイデアをあたえたことも、彼は知る由もないのであった

★☆☆☆@☆☆☆☆

へっくし！！                      ・・・誰か、噂してますかね？

と、それはともかくうまくいったようですね

題して『俺がフーケになりきって、予告状出して警備嚴重にさせよう大作戦！』

我ながらなかなかの成果だとは思います

これであのフーケが諦めてくれればよし

諦めなければ、私も暇なことですし    ミスタ・ギトーと共に戦うのも一興でしょう

それでも奪取されれば・・・まあ、それはそれです。

・・・待ってください

サイト、デルフ買って貰って無くないですか？

これは痛恨のミス！！

予告状に刺激されて、フーケが速めに動くかもしれません！！

いや、常識的に考えればそんなことは無いでしょうが・・・

むしろ、予告状が届いたその日なんて、ミスタ・ギトーすっげえ張り切ってそうですしね

うむ、大丈夫です 確か、ここは1週間が8日でしたっけ？

ということは・・・多分、そろそろ、あと1日か2日で虚無の曜日でしょう

そうになったら、多分・・・多分ですが、剣を買ってくれる、はずですよ。

とにかく、時が経つのを待っしかありませんね・・・。

厨房にでも行きましょうか

★☆☆☆@☆☆★

あいかわらず、何故か厨房には直行できますね

・・・ん、なにか良い匂いが　なつかしい匂いです――

と、私が来たことに気が付いたのか　コックさんが声をかけてくれました

「よう、きたのかい」

「ええ、どうも・・・サイトはいますか？」

と、私が訪ねると　コックさんが案内してくれました

そこには・・・・・・・・

大豆をポリポリやってるサイトがいました

「サイト・・・何をしていますか？」

私は、全力で攻撃しそうになるのを理性で食い止めながら、サイトに尋ねました

するとサイトは・・・

「おう、うまいぞ！ 大豆！ 食うか？」 スッ

大豆を差し出してきました

どうやら、炒ってあるようです

いいにおいの正体はコレでしたか

よっしゃ、死ね★

私は振りかぶると、全力（魔力なし）で殴り飛ばしました

「ぐあっ・・・、な、なにしゃがる！」

「何・・・？」

貴様こそ、この豆の大切さがわかっていいのか！！？

この世界ではなあ、大豆は貴重品なんだよ！！

醤油は、作れるとしても魚から！

味噌なんて論外だ！ クソッ・・・いや、待てよ」

フーケを捕まえれば・・・

大豆くらい出ないか？

「そうだ・・・それがあつたか！！！」

フーケだけでは無理でも、白の国、戦争を乗り越え、国に忠節を尽くせば・・・

大豆の一も二も、国から出ませんかね・・・？

「ふ、ふふふふふ・・・

すいません、サイト 少し苛立っていました

穴は埋めましたよ（フーケが） 長い間いたら、ルイズに怒られます

さ、帰りましょう」

と、それだけ言って、彼に手を伸ばします

彼は、少し驚いたように私の手をとって立ち上がりました

「つか・・・なんでそんなに大豆にこだわるんだ？」

と、私に殴られた頬をさすりながら、サイトが訪ねてきます

そんなもの、決まっているでしょう？

「私は食事が好きなんですよッ！！！」

「ええええええええええ！！！！？」

え、そんなに驚きます・・・???

次の日

「はぁ・・・床冷て」

と、ステイルの格好で1度言ってみたかったことを言い、立ち上がります

そして初めて床で寝ましたが、身体が痛いですね

大理石・・・・・・・・せめて、せめてカーペットをください

・・・と、横を見ると、珍しくルイズがもう起きていました

「おはようございます、ルイズ」

「あら、おはよう・・・・・・・・で、コイツはいつまで寝ているわけ？」

と、目下熟睡中のサイトを指差し イラついた様に言います

「・・・そうですね

多分、彼の髪の毛を可愛く結んであげれば起きるのでは？」

「やめて!!」

ガバツ、という効果音が見えそうな勢いでサイトが起きました

どうしていつもいつも認識できるんでしょうか？

もしかして起きてた？ ルイズをイラつかせてどうするんですか・

・

もしかしてマゾヒスト君ですかね？

昨日殴り飛ばしても、一言謝れば済みましたし。

「・・・まあ冗談はさておき」

「？」

「？」

二人とも何が？ みたいな顔してますね。

・・・まあどうでもいいですけど

「ルイズ、何かあるのではないのですか？

自分から起きているなんて・・・」

「それ、どういうことよ！

私がいつもずっと寝ているみたいじゃない！」

と、かわいらしく・・・実際見ると絶妙にウザイですが、手を、こ  
う・・・

なんと言うか、手のかかとを真下に突き出して

前かがみの姿勢になってプンスカしていらっしゃいます

「ハハハ・・・そんなことはありませんよ　それで、何かあるんですか？」

ここで『その通りでしょうがこの桃色娘』と煽るのも簡単ですが面倒くさいのでパスです。

私だって・・・寝起きからそんなに飛ばしませんよ。

「そうね・・・貴方達、剣を買いに行くわよ!!」

えっ

続く



**第11P いろいろ危なかったけど、裏工作は多分成功ってカンジ？（後書き）**

次回、やっどこさデルフが出るふ！

黎「死ね

しょうゆで溺れて死ね」

作「ちよっ・・・」

**第12P トリスタニアで買い物ってカンジ。 【前編】 (前書き)**

無駄に長くなってしまった・・・

※タイトル修正しました

トリトリスタニアってどこだ

## 第12P トリスタニアでお買い物ってカンジ。【前編】

そうですか・・・今日がデルフリンガーの日（私命名）ですか。

に、しても確かトリスタニアでしたっけ？

そんな名前の王都まで馬でパッパカ行くんでしたか

腰・・・大丈夫ですかね？

魔力でコーティングすれば・・・うん、大丈夫、大丈夫（自己暗示）

~~~~~

キュルケは、昼少し前・・・具体的には、サイトが

「馬だ！！　　すげえ！」

となり、なんだかんだで乗れないとか乗るとかで悪戦苦闘している
ころ、目が覚めた。

今日は虚無の曜日である

ベッドから起き上がり、ボーっとしていると、頬に暖かな風がぶつ
かった

窓のほうを見ると、窓ガラスが無く、枠が焼け焦げている。

「そうだわ、いろんな連中が顔をだすから、吹き飛ばしたんだっけ」
昨日の夜に時間は遡る

Side 黎

「アンタ達、どこ行ってたワケ？」

「（もう手遅れでしたね）」

「（ど、どうすんだよ!）」

「（私は穴を埋めていましたから、言い訳が出来ます）」

「（この野郎！ 裏切るのかー!）」

「（大丈夫、大丈夫!）」

「（何が大丈夫なんだよ!!）」

と、2人で目配せをしているのがばれていたようです

彼女が例の鬼神モードになっています

ヒシヒシと怒りのオーラが伝わって来ますね

「言い訳は・・・聞かないわよ!!」

「申し訳ございませんでした!!」

これぞ必殺土下座!!

まだ1週間なのに2回も使うとは……。

「なっ!？」

サイトが驚いていますね

ふん、馬鹿め……折檻を受けるのと、プライドを捨てるの

どちらがいいのですか……。

「ちよっ……何やってんのよ!

やめなさいよ、そんなこと!」

と、どうやら効いているようです

頭を床に擦り付け、相手のほうが高位であると示すこの『DOGE
ZA』ですが

やっぱりハルケギニア人には効くようですね

日本人もそこそこには効きますが、仕事となれば、あの社畜共……
まあ私もですが

土下座なんか簡単にしますからねえ、許してもらえるなら。

もうプライドなんか塵ほども残っていませんよ ああ怖い怖い

「……もう、わかったわよ! 許してあげるから、頭を上げなさい!」

「有難き幸せ！ 以後も忠誠を尽くさせていただきます！」

「ふふん、よろしい！」

「・・・でも、それやめてなんか気持ち悪いわ」

「そうですか、すみません」

やっぱり普通に礼儀正しく、程度がいいようですね

「それで、サイトはどうするんです？」

出来れば許してやってほしいのですが・・・」

「あ、それ無理」

「ですよー」

「もっと粘って！」

くその後く

「この犬！ バカ犬！！」

「ぎゃああああああああ！！！！」

い・・・今起こったことをありのままに話すぜ

サイトが外に追い出されたと思ったら、いつのまにか鞭で殴られていた。

何を言っているかわからねえと思うが、私も何が起きたのか分からなかった・・・

意味不明だとか不条理なんてチャチなもんじゃねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

と、今日はミス・キュルケに迫られるイベントだったようです

ご愁傷様以外の言葉がまったく出てきません

そしてとぼっちりが怖すぎます

・・・とっとと寝ましょう 寝てる相手に鞭打ちなんて事、さすがにしないでしようし

~~~~~

こんなことがあった。

「そういえば・・・今日は虚無の曜日ね」

ポツリと意味も無いことを呟いてみる

あたたかな風――　　さんさんと輝く太陽

こんな中、あのダーリンと共に出かけられたらどれほどいいか。

「・・・そうだわ、彼を誘ってどこかにいきましよう！」

・・・実際、あのヴァリエールが黙っているはずが無いだろうが、強引に押せばいけるだろう

彼女はそう確信していた

・・・ぶっちゃけ、パイオツでかくて美人な女の子に迫られればサイトはプリッツの細焼きより容易く折れるであろう。

たとえ折檻が待っていようとも。

「そうと決まれば・・・」

【神聖御着替えタイム！】

「さてと！」



こうなれば、彼女の行動は早い

織田信長も真っ青の進軍速度と行動力、さらに力もある

「アンロック！」

そんな彼女が

「（いない？）」

「・・・あれは！！」

宿敵ヴァリエールと愛しの人が出かけるのを見て、黙っているはずも無かった。

第12P トリトリスタニアでお買い物【前編】

「ほう・・・これが王都」

聞いてはいましたが・・・人の割りに、狭いですね

道路とか道路とか道路とか。

建物は綺麗なんですけどねえ

「どう、キレイなところでしょ？」

アンタたちの元の世界もそうとうな都会だそうけど、ここにはかなわないでしょう？」

こんなもん、貧国の首都とどっこいどっこいだよJKと言ったらフルボッコでしょうね

むしろそれ以下ですけど

サイトはケツ痛さに何も言いませんし、まあ技術の違いは見せておきましょう

「そうですか・・・で、ここは何百万人の都市で？」

「・・・へ？」

フツ・・・ここトリステインの総人口は400万人

水の精霊の契約により、この凶作は他国の豊作と言いますし  
けっこう以外に人はいますね

「ああ、失礼 つい自分達の秤で見てしまいました

私の国の現在の首都・・・陛下がいらっしゃる都市は85万の民を抱えているもので」

「なっ!？」

「それも、ごく狭い範囲ですよ 子爵が拝領する広さくらい・・・  
ですかね？」

そもそも千代田区、あんまり人いませんし

東京都で見れば、1千3百万人・・・百万都市は日本で12個、と

「トリスタリアと同じくらいの広さまで見たら、一千三百万人の民がいます

トリステインよりはさすがに広いですが、ガリアよりちよいと狭いくらいの国土に

1億3千万が暮らしているんですよ、わが国は・・・・・・・・どうかししました？」

ルイズが黙ってしまいました 言い過ぎましたかね？

「嘘ついてんじゃないわよっ！！」

「いや、嘘じゃないです」

多少の語弊はあるかもしれませんがね

「・・・っと、まあいいわ

馬から下りて頂戴」

「はいはい・・・ あと、その馬に乗れなかった哀れな少年はどうします？」

「痛え・・・腰が、腰が」

「まったく、情けない！！」

同じ平民でも大違いだわ！ レイはいろいろ知ってるし、馬にも

乗れたし・・・」

・・・ま、実のところ私も乗れそうになかったので、その辺の木の枝を

『これは武器だ　これは武器だ　これは武器だ　これは（r y）』

と暗示してガンダールヴの効果で乗っていたんですが。

案外いけるものですね、うん

心の震えが肝心です  
サイトに教えろって？

ハハッ　リア充はもげて核爆発でもしている・・・もとい私に何の得も無いでしょう

こういうのは、独り占めしたいものですよ

そもそも、いつでも力を振るえるようになったら、この人絶対なんかやらかすでしょうし

その場の空気に流されて押し倒したりベット入ったり押し倒したりする奴に力なんて与えれません

「いでで・・・」

「ったく!!」

お、終わったようですね

「では、いきましようか」

「何でアンタが仕切ってるのよ！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「これは・・・」

「汚ねえな・・・」

「だから、来たくないのよ・・・」

はい、私達は今、スラム街・・・というか王都の裏路地的なところにいます

そして向かう先には、剣の形の看板が釣り下がったお店があります

「RPG？」

「やっぱりそう思うよな？」

「ええ・・・ですが、汚いですね、本当に。魔王城の真横の村ですか、ここは」

「ああ、道も狭いし、裏は汚いし・・・本当に王都か？」

「同感です」

「アンタ達、聞こえてるわよ！
魔王城って何よ！！ 馬鹿にしてるの！？」

「「すいませんでした！！」」

と、サイト達と話しているうち、店に着きました

そして、店に入るなり親父さんが

「すいやせん貴族様！！

こちらら、お上にとがめられること何て何も・・・」

「客よ」

と、どうやら少し怒らせてしまったようで、ルイズが不機嫌そうに
答えます

すると、親父さんの目が誰が見ても分かるくらい変わりました

「・・・それから、私は一応剣を見る目はあります
下手なものを進めたら即刻、不敬罪で殺す。
覚えておきなさい」

「なっ！？」

「ヒッ！？」

「ちょ、ちょっとー！！」

上からサイト、親父さん、ルイズである

下手なものの進められても困りますしね。

と、その時どこからか、大きな笑い声が聞こえました

『——ハッハッハ!!! いいねえ、いいねえ

兄ちゃん! あのクソオヤジをビビらしたあ、何もんだい?』

声の出所は・・・まあ、デルフでしょうね

「インテリジェンスソードか

ふん、なかなかの剣だ サイト、これにしなさい」

と、いうか放っておいてもガンダールヴがひかれるから、どうせコレにするでしょうけど。

「はあ!? 嫌よ、そんな錆だらけの剣!」

「いや、決めるのはサイトでしょう

剣なんて、クッソ高いんですし、切れれば無問題ですよ

最悪、切れなくても殴ればいいですし、ちよいと手入れすれば錆なんて落ちますし」

多分ですけどね。 ま、ここまで錆びてたら・・・無理かな?

公園の鉄棒みたいになってます。

と、サイトは話す剣に興味がわいたのか、デルフの近くに来て眺めた後

「ちょっと見せてくれます？」

と聞いた

「ああ・・・自由にしな」

私にすぎまれたせいか、おやじさんが多少元気なさげですね

サイトはというと、剣なんかはじめて見たのか

目をキラッキラに輝かせながらデルフを見ている

『おでれーた お前、使い手か！』

「使い手？」

『自分の実力もしらねーのか・・・フン、まあいい
小僧、俺を買え 俺はデルフリンガー』

「え、ああ 俺は平賀才人だ」

『ふむ、サイトか』

「・・・ルイズ、俺決めた
コイツ買うよ！」

ふむ、原作通りですね・・・と、ルイズの顔がすげえことになって
ますね

嫌がり方が半端ないです

「えー！

何だよ！ そんな変な剣、やめなさいよ！」

まあ・・・私が口出ししなくてもいいでしょう

さあ、カッコイイ武器探しましょうかねー

「・・・ん？」

コレは・・・指輪？

蒼い・・・サファイアかな？

なんで武器屋にこんなものが・・・

ちょっとはめてみますかね（↑光物が好きだったりする

・・・ふむ、具合はいいようですね

木の枝でも武器認定出たし、いっそこれでも

『（魔力を）』

「？」

・・・声？

『（魔力を）』

・・・ひょっとしなくても、コレからですよ？

『（魔力を）』

………サイト達がまったく無視ということは、私にだけ聞こえていると

『（魔力を）』

……魔力をどうしろと？

指輪にでも流せばいいんですか？

『（魔力を）』

………まあ、やってみますかね

グッ

右手に力を籠める……体の中のエネルギーが、右手に集まる感覚がする

いつもは、ここから爆発させ、外にエネルギーを出すのだが、今はそれをせず

指に力をやる

魔殺銃はここから指先に魔力を集めて放つ某フリーザ様の技のパクリであるが

今回はそれもしない

指輪に、魔力を流す

すると、指輪が輝きだした――　　って眩しッッ!!??

「うお!？」

あまりの眩しさに、目を瞑ってしまい、目を開けると・・・

「・・・えっ？」

『お前が私の主人か？』

倒れてしまって動かないサイト達・・・と

目の前には、蒼い髪と瞳をした女性が立っていた

第13P トリスタニアでお買い物ってカンジ。【後編】(前書き)

第13P トリスタニアでお買い物ってカンジ。【後編】

むかしむかし、ろくせんねんほどむかしのおはなし

はるけぎにあに、ブリミルという

えらい えらい、魔法使いがいました。

そのブリミルは、つよい使い魔たちをつれて、にんげんに系統魔法をつたえ

エルフや亜人たちをやっつけました

そして、そのつよい使い魔たちは、4人いたそうです

神の左手 ガンダールヴ

神の右手 ヴィンダールヴ

神の頭脳 ミヨズニトニルン

神の心臓 リーヴスラシル

……でも、じつはもう1つあったのです

なまえさえもきろくにのこすことをはばかれる

れきしにのこしてはいけない だれもしってはいけない

とてつもないちからをふるい、ブリミルをまもりつづけた使い魔がいました。

あるときはエルフの大軍相手に

あるときはなかまわれをした使い魔に

また、あるときはじぶんのために。

神の腹心　そして　親友とよばれ、ひとびとのきおくのやみにほうられたそんざい

その使い魔その名は

第13P　トリスタニアでお買い物ってカンジ。【後編】

「・・・えっ？」

さすがの黎も、思考がフリーズする

『・・・ふむ、ガンダールヴかえ

ったく、何故同じ種類の使い魔が2人もおるのじゃ？
わっちの疲労も考えんか』

「えっ、と・・・えゝ??？」

『・・・落ち着くがよい

ぬし、ニホンは知っておるか？』

ニホン

聞きなれた国名を聞き、黎の脳は再起動を始め、なんとか答える

「あ、ああ」

『ふむ、ではアメリカは？
チュウゴクは？』

「知ってる 全部国の名前だ」

黎が答えると、女性は満足したように笑い

『合格じゃ！』

と言い、唇を黎の口に近づける

「ちょ、ちょっと待て！ 何を――

『んっ！』

二人の唇が重なり、その瞬間に黎の腹に激痛が走った

「ぐっ、がああ！！！！」

『うむ・・・？』

ガンダールヴの紋で慣れたかと思うたがの』

「（・・・これ、あ、死――）」

バタリ。

腹を押さえたまま、黎は気絶した。

『・・・どうなることかの』

女性 は ふう、と 小さく息を吐いた

5分後

「・・・知らない天井だ」

『嘘をつくでない
ぬし、さっきまで起きていたであろう？』

「・・・出たな妖怪指輪女」

『ああ・・・その名を聞くのも久しいの』

「言われたことあるのかよ!!」

と、テンションが変な調子になりつつある黎を軽くあしらう女性

「つーかよ、なんでこの2人は眠ってんだ？

そしてお前、ナニモノ？ 指輪であってんのか？

んでよお、なんか腹が痛かったんだけど お前何した？」

と、黎が次々疑問を言うが

『なんじゃ、折角傾城傾国の美女が唇を許したというのに
「奪ったんだろうが！」 むう？』

「つーか、俺は物にや欲情しねーよ」

と、これは禁句タブーだったようで、彼女の頬に青筋が浮き出て、顔を引きつらせる

『・・・ほう、貴様いい度胸じゃの アースインヴェイルも満足に使える身体で』

「アーシ・・・なんだって？」

『アースインヴェイル。』

神の腹心と謳われた、わっちの元の主人で、ブリミルの使い魔なんぞしとったの』

「・・・・・・・・・・・・はあ？」

『まあ、よい

質問に答えていくとするかの

まず1つ目じゃが、わっちの残りの力で眠らせたのでありんす

“契約”を、その桃色に見られると色々面倒じゃからの

それから、その下品な剣にも眠ってもらった』

「・・・で、お前は何なんだよ」

『・・・わっちは、そうじゃのー』

うーん、と腕を組み、目を瞑って考える仕草をする女性

そして目を瞑ったまま、ひねり出すように答える

『この指輪を依り代にした、超高位の精霊・・・とでもいうのか？』

ブリミルの隠されし5人目の使い魔

アースインヴィルの武器兼相棒なんぞやとった。

それ以後、あやつの持つ独特の魔力を流されねば、わっちは復活できんはずじゃった』

カツ、と目を開け 黎に近寄る女性

『なのに、わっちは蘇った

ぬしの手によって、の

つまり、ぬしが6000年ぶりに現れたアースインヴィルの素質を持つものといったわけじゃ

分かってくれたかの？

さっきのはコントラクトサーヴァント。

ぬし、腹が痛くなったそうじゃな？

おめでとう、これで主は世界最強と言っても良いほどの力を――

└┐

と、そこで彼女は言葉を詰まらせた

「・・・あん？」

黎が、不思議そうな声を出す

『おかしいの

ぬしから紋の雰囲気を感じられん　ちよっと、腹を見せてたも』

と言って、彼の服をめくり、腹を確認する

『・・・刻まれておらん

どうやら、ガンダールヴの契約のせいで、威力が弱まったようじ
ゃの』

と、彼女はため息交じりに答えた

「オイオイ・・・するってーと、この俺は痛い思いをしただけか？」

『なにをぬかす　このわっちと接吻を交わせたではないか
それに、紋の力が弱まっただけで、契約は成功じゃ』

「え、そうなの？」

『うむ・・・少し調べたが、どうやら大幅な制限が付いたよ
うじゃ。

ぬしが相当精神を高ぶらせないと、発動せん。

発動したら、ガンダールヴなど目ではないのじゃが、それこそガ
ンダールヴの

500倍は精神を高ぶらせる必要があるの

・・・ま、先代も同じようなものじゃが。』

「・・・というと？」

『先代とも、契約は失敗したのじゃ

そもそも、あやつはブリミルに呼び出されたのに、わっちと契約したのじゃ

ブリミルの前で『男とキスって、それどんなバツゲームだよクソッ！』

とか叫んでおったし、わっちの魅惑に負けたのじゃろう』

「話が見えんぞ」

『まあつまり、先例があるのじゃからめげずに頑張れ、というところかの

たしか、あやつは『燃え上がれ、俺の小宇宙！』とか叫んで精神力を底上げしておったの

あと、発動中は言動が偉そうになっておったが、そんな副作用は無いから

安心してくりゃれ。』

・・・と、その言葉を聞いた黎は汗をダラダラ流しながら考えた

「（心当たりがありすぎるんだが、その台詞 え、なに？

ソイツ聖闘士・・・つか日本人だろ！！ 中二病を発動すれば

精神力って上がるの！？）」

『ちなみに、あやつは別世界のニホンから来たというておうたの戯言と思うておったが、今思えば・・・いや、戯言じゃの』

「はあ・・・（やっぱりか） で、俺はどうすりゃいいんだ？」

『まあ、わっちを買いなんし
それでこの虚無の娘に仕えるがよい』

と、てつきり伝説どうこうで面倒くさいことになるかと踏んでいた黎
は、すこし拍子抜けしながら

「ああ、わかったよ」

と、返事しておいた

『うむ、わっちは戻るが まあ安心できるようになったら、声をか
けてくりやれ。

別におやじのいる前でもかまわんが、武器以外に精霊が宿るのも
珍しいし

値を吊り上げられるじゃろうな』

「（そもそも何で武器屋に・・・）わかった お前はしばらく放っ
ておくよ」

『そうしたほうが無難じゃな

さて、そろそろ彼奴らも目を覚ます。

わっちは戻るぞ――』

と、言った瞬間女性は消え、黎の指には蒼い宝石の入った、小汚い
指輪がついていた

「・・・そうだ、名前聞いてねーや」

とりあえず、帰ったらいろいろ聞き出してみようと決心する黎であ

った

人物ファイル1

空雷時 黎

ごく普通の（？）サラリーマンだった男

普通にしては二重人格だったり、いろいろ事情がある予感がする青年

今はステイルⅡマグヌスという赤毛の長身男性の姿になっている

知識は、女神の力によって、いろいろなことが詰められている

が、その知識は頭の中に図書館があり、知識という本を読んで、それを朗読したり

まねている状態だという。なので、緊急時に戦闘方法を引っ張ってきたりはできない。

また、食事が好きで 前世から物を食べるために全世界を飛び回っており

北朝鮮にも行った事がある 犬の入ったスープがお気に入りだった様子。

ハルケギニアでは、いろいろリア充な目にあっているが、本人は自覚なし

むしろ、死んだ後抱いた希望（大豆）が砕かれたので、やや落ち込んでいるが

別の希望（大豆）も持てたので、頑張っていくようだ

先にも書いたが、テンションが上がると口調が乱暴になる

また、普段から能力を使って暴れたいと考えていたりするが

危ないので技の名前を考えるに留めている

また、重度の厨二病患者でもある

基本的には無害だが面倒くさくなると力ずくで物事を解決しようとする癖があり

オヤジを脅した結果、さっそく綺麗な剣のフラグをへし折った。

最終的には、領地の経営もしたいと思っていたり
原作の魅惑の妖精亭にも行く予定だそうだ。

第13P トリスタニアで買い物ってカンジ。 【後編】 (後書き)

説明回になっちゃったかな・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8210s/>

転生者は超能力者でガンダールヴで【*****】

2011年8月27日11時15分発行